

紀行文

裏山探検  
極楽寺山  
大峯山  
阿弥陀山縦走と周辺  
ウォーク  
宮島弥山  
駒ヶ林、岩船岳縦走  
向山、窓ヶ山縦走  
阿弥陀山一周  
東郷山縦走

第一回徒歩  
旅行顛末記

YAMANAKA TOMOTAKA  
山中與隆

Duo-Yamanka

ひとり、

山を歩く



ひとり、山を歩く

---

山中與隆

## 目次

ひとり、山を歩く 1

《初夏のひとり歩き二〇〇一》 39

第一日「探検」 39

裏山 39

第二日「登山」 56

極楽寺山 (びくらくらくじやま、693m) 56

第三日「縦走」 76

大峯山 (おおみねやま、1039.8 m) 76

阿弥陀山 (あみだやま、842 m) 76

第四日「縦走と周辺ウォーク」 104

阿弥陀山 (あみだやま、842 m) 104

第五日「登山と宮島北半周」 139

宮島弥山（みやじまみせん、529.8 m）

139

第六日「縦走」 175

駒ヶ林（こまがばやし、509 m） 175

岩船岳（いわふねだけ、466.6 m） 175

御床山（みとこやま、354 m） 175

第七日「縦走」 229

向山（むかいやま、665.9 m） 229

窓ヶ山（まどがやま、711.4 m） 229

第八日「一周」 257

阿弥陀山（あみだやま） 257

第九日（最終回）「縦走」 286

東郷山（とうごうやま、977.4 m） 286

《第一回徒歩旅行二〇〇〇》顛末記 329

出発 330

広島市に入る 337

千代田にて 342

《京屋》旅館 352

再び歩き始める 370

変更したコースを歩く 380

旭温泉目指して 389

旅行の続行を断念  
399

帰宅  
410

反省  
413

編者あとがき  
421



ひとり、山を歩く

山中與隆

雪がちらつく寒い一日だったが、午後から晴れてきた。きょうは特に、良く晴れた夕空を太陽がゆつくりと落ちてゆくのが見ものだった。

落日は大峯山の左肩の辺りであつた。目を焼くぎらぎらした太陽が、山の向こうに没していくにしたがつて力を失い、やがて全身を没しきつた瞬間に、山はシルエツトとして突然浮かび上がったように見えた。太陽が身を隠した後も、山の背後から繰り広げられるさまざまな光の演出は続いた。辺りの風景が暗くて見えなくなつてからも、山々の稜線をめぐるひかりの変化は、金色になつたり、オレンジ色に

なったりしながらいつまでもつづく。ほとんど色を失った空に黒々とくつきりした線で浮かびだした稜線は、この厳寒期の空気と周囲の静寂の中に厳然と存在感を示している。

一時間以上も妻と眺め尽くした。

こんな時間に時間と風景を、しかも自分の部屋から独占的に享受する贅沢をしてバチが当たらないだろうか。

これは、湯来町（ゆきちよう）の新しい家に越してきて十日目ころの日記の一部である。「自分の部屋」というのは、後に書くように私の書斎兼チェロ練習室のことである。この部屋の西向きの窓から眺めた夕焼けであった。二〇〇〇年の一月下旬のことである。

いまは定年退職して二年目、どこかに再就職するというのはしないことにして、三〇〇日分の雇用保険とそれがすんでからの年金で食いつなぎながら、いわゆる充電とこれからのライフワークを立ち上げるためのこつこつとした勉強の生活を送っている。充電としては、毎日チェロを弾き、週に一回アマチュアオーケストラの練習に参加し、ときどきわが家に音楽仲間が集まって室内楽をする。たまに日帰り

で行ける山に出かけていく。収入が年金だけというのはかなり厳しいが、ライフワークが必ず何らかの  
実を結ぶと信じている。そのためにも安易に勤めに  
出て、勉強のための時間をなくすことをしないよう  
心に決めている。高齢化社会の年金問題が議論され  
る中、受け取る金額は生活に十分であるとはいえな  
いが、六〇才から受け取れる世代であつたことは幸  
運で、ありがたいと思つている。

私が定年退職をしたのは一九九九年十二月末で、六〇才を五〇日過ぎたときであつた。だからちやうど西暦二〇〇〇年というきりのいい年から、私の第二の人生は始まつた。ミレニアムという、私がそれまで知らなかつた言葉が満ち溢れた年である。一九世紀から二〇世紀への変わり目は、《世紀末》という独特の響きを持って語られるが、今回は世紀末というより二一世紀の幕開けとして何かを期待する表現

が目立っていたように思う。

最後の勤務地は東京であつた。私が勤めていた小さな会社では、制度上は六〇才が定年だが、状況によつては二、三年の延長は認められていた。しかし私は、六〇になつたらすぐに退職することを数年前から決めていた。例え一年でも体力と気力が衰えないうちに、次の人生を始めたかつたからである。だ



から退職後に備えてその前の年から、ここ広島市の西に位置する山沿いの佐伯郡湯来町に小さな家を建てた。そして一九九九年十二月二十九日に最後の勤務を終えると、翌二〇〇〇年一月十三日に新しい家に引っ越してきた。

娘が一人いるが、東京の学校を出て東京の会社に勤め、同じ会社の男と結婚してそのまま東京で生活を続けている。だから新しい家は、夫婦二人のこれ

から先の生活の拠点である。

広島は、私たち夫婦の両方にとって、一応郷里といえるところである。私は大学を出てから七年間佐伯郡内の小学校に勤めた。その後ある人の誘いがある。民間会社に転職して広島を離れ、定年まで勤めた。

湯来町は妻の両親が、家を建ててからもう二十年以上住んでいる土地で、私たちはその敷地の一部を

借りて自分たちの住む家を建てさせてもらったのである。

私たち二人のこれからのライフスタイルに合わせて、限られた予算の中で練りに練った設計を考えたのは妻である。小さいが快適な住まいができた。

妻も私もいまのところいわゆる無職という分類になるのだろうか、妻は趣味と実益をかねてロシア語をやっており、ときどき通訳を頼まれたり、化学関

係の技術翻訳をしたりしている。これがわが家にとつて年金以外の若干の収入につながる場合もある。私については冒頭に書いたとおりである。ライフワークと考えているのは、一笑に付されそうなので言にくいのだが、文筆家としてプロになることである。いまのところそれによる収入はゼロである。

新しい住まいがあるのは砂谷（さごたに）という

地域で、同じ湯来町でも有名な湯来温泉からは一〇キロほど南で、その分だけ広島市の中心部にも近い。わが家は、東郷山（とうごうやま）を含む山地の南側のやや高くなつた台地にあつて、緩やかな斜面の中の田んぼに囲まれている。周囲には民家が五〇メートルか一〇〇メートルといった間隔で点在している。

わが家のどの窓にも緑があふれ、開け放すと真夏

でも爽やかな風が吹き通る。冬の朝は、根雪にはならないがしばしば一面の銀世界が楽しめる。瀬戸内の沿岸部から車で三〇分ほど山間部に入ったところだが、標高は三〇〇メートルくらいあって、冬の間沿岸部は晴れていてもここは雪という日が結構ある。

前述のとおり、わが家の設計はすべて妻が考えたのだが、私の唯一の希望は、私の部屋から大峯山（おのみねやま）が眺められることであつた。その希望

は設計の中に採り入れられた。だから私の部屋には西向きの大きな窓があり、そこからはまず目の前に緑濃い阿弥陀山（あみだやま）が均整のとれた緩やかな三角形の姿を見せている。そしてその左側から色を薄めながら稜線が重なり合って伸びた先に端正なピラミッド形の大峯山が見えるのである。稜線上に何本か見える送電線の鉄塔もこの風景の特徴である。夕日が、冬は大峯山の左側に、夏は阿弥陀山の

右肩のあたりに沈んでいく。この家は四方どの窓からも緑が、というより緑だけが眺められて素晴らし  
いのだが、特に私の西の窓は晴れてよし、降ってよ  
しの最高の窓である。民間会社に転じてからは、名  
古屋近郊、東京近郊の比較的街中に住んでいたため、  
それらの家の窓からは狭い植木の通路をはさんだ向  
かいのアパートか、隣の家トイレや台所の窓が見  
えるだけだったから、いまの環境は夢のようである。



ここで、非常にローカルなこの小文を読んで下さる方々のために、宮島沿線とそこから少し山間部に入ったあたりのおおよその地理的状况をもう少し説明させていただく。

広島湾は、広島市中心部の三角州を一番奥にして南に向かつて裾広がりに瀬戸内海に向かつて開いている。したがって広島市から西に伸びる海岸線は南

南西に伸びていることになる。広島市は広島県の西寄りにあつて、南南西に三〇キロも行くとお隣の山口県に入るが、東隣の岡山県との境までは一〇〇キロ以上ある。広島市は言うまでもなく瀬戸内海沿岸の都市であるから、広島港から海の方を見ると遠近の島が重なり合つて、水平線というものは見ることができない。正面近いところに安芸の小富士と呼ばれる似島（にのしま）がある。広島を訪れた人の目

に必ず触れる島である。その背後に大きな能美島（のうみじま）と江田島（えたじま）がある。この二つの島は実は陸続きである。似島の右後やや遠くに安芸の宮島が形良く横たわっている。厳島（いつくしま）とも呼ばれる。

宮島は、広島市の中心部から南南西に二〇キロほど行った佐伯郡大野町の対岸にある。いまは広島市街から大野町までほとんど街並みが途切れることが

ない。海岸線を国道二号線、JR山陽本線、広島電鉄宮島線が通っており、それに山陽新幹線、山陽自動車道が山沿いを走っている。

宮島は、およそ南北一〇キロ、東西五キロという大きさの島である。南北、東西と書いたが、長手の中心線は陸地の海岸線とだいたい平行になっているので、正確に言うと南南西北北東が一〇キロ、南南東北北西が五キロと言うことになる。本文に出てく

る宮島弥山（みやじまみせん）、駒ヶ林（こまがばやし）、岩船岳（いわふねだけ）、御床山（みとこやま）などは宮島の山である。宮島弥山、駒ヶ林などが形作る宮島の姿は、寝仏の顔に例えられることもある。均整の取れた美しさで、広島湾を見るとき何処からでも目に留まる。一方島の南の方にあつて、宮島弥山などより若干標高の低い岩船岳は、沿線部からだと廿日市市より南に行かないと見えない。

本土と島の距離は、連絡船が通っている宮島口と宮島棧橋のあたりで二キロくらいであるが、もう少し南の大野瀬戸あたりには三〇〇メートルくらいのところもあり、鹿が泳いで渡ると聞いたことがある。

宮島の対岸に広島電鉄宮島線の終点とJRの宮島口駅がある。古くから日本三景の一つとされ、最近には世界遺産にも指定された宮島の厳島神社に行く人はほとんどがここを通る。

宮島口から北に廿日市市を通つて、広島市方向に一〇キロほど戻つたあたりは広島市佐伯区五日市である。私が昔廿日市に住んでいたころは、それぞれまだ佐伯郡の廿日市町と五日市町であつた。五日市から北西に新幹線、山陽自動車道の高架をくぐつて一五キロくらい山間部に入つたところがわが家のあつる湯来町の砂谷地区である。いまは道路がよくなつていて、五日市からわが家まで三〇分かかる。

しかしいまでも、広島市内で湯来から来たというところ、ずいぶん奥から出てきたねと言われることがある。昔は実際に時間もかかったし、冬の雪も山奥という印象を強めていたのである。その途中に窓ヶ山（まどがやま）がある。窓ヶ山は岩の目立つ山で、ドームが二つ並んだ特徴的な山容は、五日市の沿岸部からも広い平地の奥の方に見える。

廿日市沿線から間近に眺められる極楽寺山（ごく



らくじやま）は私の高校、大学時代のふるさとの山である。石川啄木が出身地盛岡の岩手山を仰いで歌った、

ふるさとの山に向かひて

言ふことなし

ふるさとの山はありがたきかな

という歌を、自分と極楽寺山になぞらえて眺めたものだ。もちろん二〇四メートル、深田久弥の日本百名山にもある岩手山と六九三メートルのローカルな山とでは比較にならない。しかし廿日市からの極楽寺山は、真ん中に小さな鞍部を持ち鬱蒼と木に覆われた頂上に特徴があつて、私は好きだつた。中学生のころ父から貰つた二眼レフでずいぶんたくさん、この山の写真をとつたものだ。当時は白黒写真だつ

たが、いま見ても極楽寺山を眺めたころの心境が思  
い出される。心が揺れ動いて止まない青春時代の私  
から見ると、いつも泰然自若としたその姿がうらや  
ましかった。

さて、このような土地に暮らしはじめて一年半、  
この間に案外身の回りにいろいろなことがあつた。  
初めのうちは家の中の片付けや、新居を整えるため

の仕事が続いたが、半年経ってようやくそれらが落ち着いたと思つたら、母屋の義母が脳梗塞で倒れ、骨折をしてそのまま入院生活になつてしまった。いまは、骨折は直り体の健康は取り戻したが、痴呆が残り廿日市の介護施設に入所している。義父と私たち夫婦の三人で週に一、二度面会に行くという生活が続いている。骨折治療の病院に入院していた三か月間は、三人が交代で毎日の付き添いをやっていた

ので、そのときに比べるといまはずっと、それぞれ自分の事をする時間が取れるようになっていゝる。

妻はロシア語を生かして、チェルノブイリ救援のボランティアに長くかかわっている。そのためにもこのところ何年かは、年に一回か二回ウクライナに二週間くらいの予定で出かけている。これまでは私も務めがあつたので、妻がいなくても私自身の生活はいつもと変わらなかつたが、定年後は二週間も一人

で家にいるのも芸がないので、私もその期間に合わせで出かけることにした。

去年は、五月と六月に続けて妻のウクライナ行きがあつたので、私はその両方に徒歩旅行をした。わが家からまず中国山地を越えて山陰の浜田に出て、そこから山陰海岸を西に歩き、下関を回って、今度は山陽側を東進して帰ってくるという計画である。だが一回目は失敗した。一日の行程を平均四八キロ

として、一四日間でちようど家までかえつて来られるようにしたのだが、一日に一〇時間から一二時間歩くというペースに体が全くついていかず、二日分歩いただけで旅行の続行を断念した。体というより、足の裏が一日四八キロに耐えなかつたのである。一日目を終えた時点ですでに足の裏の皮が広い範囲剥けそうになった。それが一晩では回復せず一日旅館で休んでから、若干痛みが軽くなつたので二日目の

行程を歩いた。しかしそれで完全にダメージを受けた。大雨の中スニーカーを血だらけにして島根県旭町の宿にたどり着いたが、それが限界であつた。その翌日宿の車で近くのハイウェイバスの停留所に送ってもらつて、バスとタクシーを乗り継いで帰宅した。

それから妻の次の出張までの約四〇日間に、足の裏の皮が再生するのを待ちながら、計画を練り直し



た。まず一日の行程を平均二五キロとした。一回目の約半分である。そうすると一回目に昼食をしたところが二回目では、その日の宿泊地となった。そして一回目の宿泊地には二回目も宿泊した。二度目となった宿では顔を覚えていてくれて、親切に対応してもらえた。二回目は一日の行程を減らしただけでなく、靴と靴下もアウトドア用品店で相談して整え、出かける前には約三〇キロのテストウォークもした。

もつとも、靴を買った店の人は、一回目の失敗は靴のせいではなく、足の強さの問題だろうと言っていた。二回目の計画では一四日間の家まで帰ってくることはできない。山口県日本海側の油谷町というところが旅の終点である。そこからは、下関経由のJR線で五日市まで来て、五日市からわが家までの約一六キロを、仕上げに歩くという計画であつた。

こんどは、問題なく一四日間歩き通すことができ

た。結局一日の限界というものがあつて、それを越さなければかなり継続することができるということがわかつた。その日の疲れが一晩で回復することが重要なのだ。もちろん日を重ねるにつれて、体全体の疲労の蓄積はあつた。この二週間で体重が六キロ減つた。また六月下旬という時期だから仕方がなかつたのだが、ほとんどの日が雨の中の歩きとなつた。特に一三日目の午後は猛烈な土砂降りと強風になつ

て、ほとんど一〇メートル先も見えないくらいの瞬間もあつた。舗装道路の上を川のように水が流れ、排水溝は排水し切れなくて水を吹き上げていた。それでも宿まであと一時間くらいであることを示す標識を見たときは、長かった旅がもうすぐ終わるといふ感慨が胸に迫つて、激しく顔に吹き付ける雨とともに涙も流れた。

実は、この旅が終わつた次の日に妻も帰つてきて、

久しぶりに母屋の両親と四人が顔を合わせるはずであつたが、五日市駅に帰ってくる妻を車で迎えに行つて家に帰つてみると、義母が家の中で転んで骨折をしていたのである。

それから一年、今年も妻のウクライナ行きの時期がきた。今年も、ウクライナは一回だが、その前に別の通訳の仕事でロシアの極東部に約一週間の出張

が入っている。私は、間に二週間をはさんだ妻の二回の出張期間に合わせて、今年もちょうど昨年と同じような時期なので、〈初夏のひとり歩き二〇〇一〉と名づけた徒歩旅行を計画した。いまはお金を使う余裕はないし、母屋の義父も今年は一人暮らしなので、すべて日帰りできるコースにした。それがこれから書く九つの小さな旅である。

## 《初夏のひとり歩き二〇〇一》

## 第一日「探検」

裏山

二〇〇一年五月五日（土・祝）（約四キロ、一時間）

この日妻が、新潟経由でロシアの極東部にあるダ

リネゴルスクというところに通訳の仕事で出張する。妻を広島西空港に送るため、朝六時半に車で家を出た。いまは、大きな広島空港が内陸部に出来たため、広島西空港はサブ的な役割になっている。広島市内にあつてアクセスはこちらの方がずっと便利だが、主要な路線はここからは出ていない。新潟便は、毎日はないので、出国は明日だがきょうの便で行つて新潟に一泊することになる。空港のコンコースは、



コンコースという言葉が似合わないくらいこぢんまりとしていて、小さな町のバスターミナルといった感じである。妻がチェックインしたあと、誰も見ていなかった。いなかだったので、空港の駐車場のあたりで、妻の乗った飛行機を見送ることにした。送迎デッキが建物の屋上にあるのだが、工事中とかで立ち入り禁止になっていた。出発時間が近付いたころ、駐車場に一组の夫婦がやってきた。どうやら同じ飛行機を見送

るつもりらしい。小さなプロペラ機が、その前に飛び立った福井行きジェット機よりずっと短い滑走で飛び上がって、北に向かって遠ざかっていった。

夫婦は、特に奥さんの方がその飛行機に向かって長いこと手を振っていた。

いくつかの用事をすませて昼前に帰宅した。妻から新潟に無事着いた旨の留守電が入っていた。簡単な昼飯をすませて、かねての計画通り裏山探検に出

かけた。

裏山というのは、わが家のすぐ北側に見える山のことである。その山の名前はわからないのだが、わが家からその一番手前のピークまで直線距離にして一キロくらいしかない。わが家の北側には東郷山を中心とした山地のまとまりがある。その東郷山を我が家の窓から見ることにはできないが、二、三分歩い

て小高い畦道に出ると、裏山の左側に頭を出しているのが見える。わが家からその頂上までの直線距離は三・五キロである。その山地の周りには、それぞれ北西側とわが家のある南西側を国道四三三三号線、南東側は県道七十七号線、北東側は県道七十一号線がある。そのうち北東側はさらにその先の山地とつながっていて、県道七十一号線は不明峠（あけずとうげ）でその鞍部を越える。不明峠は標高が五一〇メートル

ルもある。あとの三方面の道路は、いずれも道路が両側の山地をはつきりと分けている。特に北西側の国道四三三号線は、水内川が流れる広い谷である。もつとも、これらの道路そのものがすでに標高二〇〇メートルから三〇〇メートルのところにある山間部である。

この東郷山を巡る道路一周は、先に書いた昨年の一、二回目の徒歩旅行に先立って、足の回復具合をみる

ために歩いた。また今年の二月には、妻と二人で《ひろしま百山計画》のためのトレーニングと新調した登山靴の慣らしを目的に歩いた。このときは、新しい靴でいきなり三〇キロ近く歩いたため、二人とも足首の靴が当たる部分の痛みに苦しんだ。そのときは、こんな靴で山が歩けるのかと心配になったが、その後近くに買い物に行くときにも履くようにしていると、一週間もしないうちにすっかり調子よくな

った。《ひろしま百山計画》というのはガイドブック「ひろしま百山」(中国新聞社発行、一九九八年十月十五日一刷、同年十一月十五日二刷。広島県山岳協会著)に載っている広島県の百の山を今後十年かけて全部登ろうというもので、五日市に住む高校時代の同級生の夫婦と四人で始めようとしている計画である。

これらの道路で囲まれた山地では九九七・四メー

トルの東郷山が最高峰だが、他にいくつもそれに近い高さのピークがあるため、周りの道路から東郷山の頂上が見えることはそう多くない。東郷山を見ようとしたらむしろ離れた場所からの方がいい。なお、東郷山の頂上を湯来町と広島市の境界線が通つていて、先のガイドブック「ひろしま百山」には、東郷山を広島市の最高峰としてある。



伐採したばかりの材木を満載したトラックが、ときどき裏山の山の中から下りてくる。それをわが家の茶の間から見て、その奥の方がどうなっているのか、いつか行って確かめてみたいと思っていた。茶の間の正面に見えるのは裏山の東に伸びる尾根の一つで、低い尾根の稜線が窓いっぱい伸びている。だからその低い尾根の向こう側に何か新しいものが見えそうな感じがするのである。

トラックが出てくる道は、平成四年修正測量の国土地理院二五〇〇〇分の一「川角（かわすみ）」で見ると、二キロばかりで行き止まりになっている。

荷物は何もなしで、登山靴だけ履いて午後二時過ぎに出かけた。約三〇分歩いたら伐採現場に出た。そこから先は道が無くなっている。やはり地図の通りであつた。しやくれた小ピークを巻いたあたりだ。そこはかなり広い範囲にわたって、ほとんどの木が

切られている。

途中どこかでこの山地を区切る南東側の県道七七号線が見えないかと期待したが、だめだった。山の向こう側が見えるほどの尾根には達していないのだ。しかし、行き止まりの手前五分くらいのところ素晴らしいビューポイントがあつた。

それはコース中最も標高が高い地点で、西側に大きく展望が開けている。目の前はかなりの急傾斜で

谷が落ち込んでいるのだが、そこは雑木林になっていていま萌えるような新緑が盛りである。曇っているきょうでさえ目の覚めるような感じであつた。それに続く植林された常緑樹の濃い緑は黒々として、手前の新緑とコントラストをなしている。そのずつと向こうに湯来町総合体育館や杉並台団地の家並みや道路などが続く。そしてなんといつでもここは大峯山と阿弥陀山を見る最高のポイントである。小高

いところから眺める両山は大きく見える。遠くに廿日市方面の極楽寺山や野貝原山（のがいばらやま）ではないかと思われるやや大きな峰が見える。海岸線の側からだとも見まぢがえることがないそれらの山だが、こちら側からだとも裏から見ることになつて、はつきりと確認することができない。宮島弥山、大野の経小屋山（きようごやさん）、大野権現山（おおのごんげんやま）なども探したがわからなかつた。

裏山の方に向かって入っていくので「裏山探検」としたが、その裏山に登れそうな分かれ道は無かつた。南側から見る裏山は、家から見るのと違って、案外長い頂上尾根を持った格好の良い山だ。

少し景色を眺めてから帰った。ちようど一時間の散歩であつた。

こんど妻と来よう。毎朝の散歩にちようどいいかもしれない。ビューポイントからの写真も撮りたい。

今年のシリーズが計画通りスタートできたので気分がいい。いまからシチュー作りにかかる。これからの「ひとり歩き」のための夕食となる大事な仕事である。あすは、市民オーケストラのレクリエーションで県立中央森林公園に行く。広島空港の近くだ。またあさつて日曜日はオーケストラの練習がある。次のひとり歩きは月曜日である。

## 第二日「登山」

極楽寺山（ごくらくじやま、六九三メートル）

五月七日（月）（平面距離約一〇キロ、主として山道、  
三時間三〇分）

きょうの予定は阿弥陀山登山だった。すっかり用意して、朝八時に出かけようと、母屋の義父に声をかけたなら、義父は縁側から顔を出して、



「きょうは廿日市の病院に連れていってもらうことになつてゐる日じゃないか」

と言う。私は、その病院行きのことをはつきりとは聞いておらず、また妻の出張期間中は、義父も元気なのだからお互いに独立して行動しようと思つたと打ち合せてあつたのである。それを義父は、忘れてはいなかつたが、本気で考えていなかつたとみえ、何の心積もりもしていなかつたようだ。

少し頭に来たが、登山は中止して病院送りを引き受けた。気持ちを落ち着けながら、時間までバツハの無伴奏ヴァイオリン・パルティータのプレストをチェロ用に写譜した。そうしているうちにふと思いついた。廿日市の病院なら極楽寺山の登山口が近いはずだ。あれに登ろう。

リュックと登山靴を車に積んで、義父と出かけた。

十一時ちようどに病院着。車をそのまま病院の駐車場に置いて、靴を履き替え、隣のコンビニでおにぎりと飲料を買って出発した。

目標の極楽寺山は目の前に見える。昔の記憶だと、登山口は病院のあたりから遠くないはずだ。しかし道路などがすっかり変わっていて、どの辺にあるのかわからない。とにかく麓に近付くために原（はら）地区の方に向かって歩いた。山陽自動車道

をくぐって二、三分歩いたところで、農作業をしているおばさんに訊いてみた。それが運良く登山道のことをよく知っている人で、ここからだと言ったルートは遠いので、平良（へら）ルートがいいと教えてくれた。

少し戻って、山陽自動車道に沿った山側の道を北に進み、宮島サービスエリアというのの横を過ぎたあたりに極楽寺山の案内板があった。まずは石段を

登っていくようだ。高速道路建設で削られた分だけ、石段を登ることになったのだ。さっきのおばさんは、たまたまこの方角に用があつたらしく、後ろから軽二輪で近付いてきて、

「気をつけて行ってらっしゃい」と声をかけてくれた。

石段を一〇七段上がると山道が始まった。廿日市に住んでいた学生時代まで何度も登った山道のはず

だが、四十年以上経つたいま何の記憶も蘇らない。高速道路をはじめあまりにもこのあたりの様子が変わってしまっている。

途中木々の切れ目から、廿日市の木材港方面や宮島方面などが垣間見られる。きょうは一日曇りの予報で、登っているときはかなり雲が厚く、雨の心配もあつたが、案外遠望がきく。また道はよく踏みならされている。さつき草花をあれこれ見ながら登つ

ている二人連れのおばさんを追い抜いた。

極楽寺まで「あと六〇分」の案内板のところまで小休止した。そこから一〇分少々登ったら「あと四〇分」と書いてある案内板に来た。案内板の倍近いスピードで歩いていると気をよくしたが、そこから「あと二〇分」という案内板のところまでは私もほぼ二〇分かった。登山口から一時間一五分で頂上に着いた。終始登りが続いているので後半になるとスピ

ードがにぶつてしまう。

頂上の極楽寺の境内にある展望台でおにぎりを食べた。ここは山の北側に車道があつて、かなり頂上に近いところまで車で来ることが出来る。昨年帰省中の娘夫婦を連れて車で来たことがあるが、そのときにもいた老犬が、私が食べている間中そばにいたのがうつつとうしかつた。寺で飼っている犬らしい。なにしろ至近距離にいて、じつと食べる手元を見つ



めていて、ときどき足を踏み変えたりする。その動きが、いまにもおにぎりに飛びつくのではないかと見えるので落ち着かない。しかしおとなしい上に、非常に年をとっていて実際に飛びかかるようなことはなかった。そのうち何かの工事関係者らしい人が一人、展望台で弁当を食べ始めた。老犬は、今度はそちらに付きつきりになった。その人も、  
「あつちに行け」

などと言っていた。犬が退いてほつとしたのも束の間、展望台のすぐ下にある公衆便所のくみ取りが始まった。

そのとき弁当を食べていた人が、ハチクマの大群が上昇気流に乗って下の方から上がってくるのが見られるかもしれないと教えてくれた。毎年五月十日頃から二週間くらいの間、その大群の飛翔がほとんど外れなしで見られるというのである。ときには一

〇〇〇羽もが滑空する様は壯観だという。さつきお寺の奥さんが双眼鏡で見っていたから、そろそろ来るかもしれないと言っていたが、私が頂上にいる間には現れなかった。

帰って百科事典で調べたが、ハチクマというのは出ていなかった。昼間の工事の人は鷲鷹科だと言っていた。大型の鷹としてクマタカというのは載っていたが、そのことかどうかはわからない。

くみ取り車の横をすり抜けて、下山にかかった。

山門を出るとすぐ、左に五日市方面に下りる道がある。しかし、危険としてロープが張ってあった。この地方は一昨年夏の集中豪雨であちこちに相当の被害があつたのだが、当然登山道などもそのために荒れていて、修復されていないところが随所にあるはずである。

降り始めてすぐさっきの二人連れのおばさんが登

つてきた。降り始めた私を見て、

「いまごろ来ました」

と笑いながら声をかけてきた。

平良方面への道を一〇分くらい行つたところで、右に原方面への道が分かれている。下りはそちらを通ることにした。急坂続きの道であつた。分かれ道から二〇分で原の集落を見下ろす展望台に出た。その足下に国道四三三三号線の長野ループがあつた。山

腹の急坂をループ状に回りながら上り下りする道路で、長野というのはこのあたりの地名である。この国道は前述したようにわが家の近くも通っているが、極楽寺山の北側の山腹を越えて廿日市に通じている。峠を越したあたりからの宮島方面の瀬戸内海の眺めが素晴らしい道路である。この道の途中から、極楽寺山の頂上近くへの林道が続いている。

急な階段を下りて、長野ループの自動車道路に出

た。そこから五〇分歩いて、廿日市の病院駐車場に着いた。弁当時間を含めて二時間半の登山であつた。

極楽寺山には、むかしずいぶん何度も登つた。私は、中学校は広島市内だつたが、遠足でここに登つたことがある。下山中に左足薬指にできた豆が潰れて化膿し、歩いている中に腫れあがつて友達の肩を借りながら廿日市の電車站にたどりついたことがある。

った。

廿日市の高校に行っていたころには同級生と登り、頂上で遊びすぎて下山が夜になったことがある。山の北側に頂上近くまで林道が来ており、その長い道をわいわい喋りながら降りた。いまの舗装されている林道と同じ道だったのかも知れない。満月の月明かりで道は照らされ、切り通しの土の斜面が真っ白く輝いていたのがいまでも瞼にうかぶ。のちに東山



魁夷の「月出ずる」という絵を知ったとき、このとき山の中でみた満月の印象が見事に表現されているのに感動した。これも何年も後のことだが、マーラーの「大地の歌」の「告別」を聞くときにもあの夜の山中の雰囲気が蘇る。また歩いている間中、どこかわからないが北の方でさかんに稲光がするのにも、雷鳴はまったく聞こえないというのも強く印象的であつた。里に下りてから、同級生の家のお寺があつ

たので、もう八時ごろだったと思うが、おしかけて冷たいお茶をごちそうになった。そこは湯来町で、いまもそのお寺はある。人形のようにかわいくて人気があつたその同級生は、いまは遠くに嫁いでいるが元気だと最近聞いた。

二年間の浪人時代にはよくひとりで登った。頂上付近に蛇の池（じやのいけ）というのがある。取水口のコンクリートの上で昼寝をして目を覚ましたら、

私の周りに何匹もの蛇がぐにやぐにやと寝そべっていた。ギョツとしたが、蛇たちを驚かさないようにそつと起きあがつてその場を離れた。気付いてのろのろと逃げた蛇もいたが、知らん顔でそのままじつとしてゐるのもいた。

結婚前に妻と二人で、ところどころ日陰に雪が残っているときに登ったこともある。思い出の詰まった山である。

## 第三日「縦走」

大峯山（おおみねやま、一〇三九・八メートル）

阿弥陀山（あみだやま、八四二メートル）

五月九日（水）（山道を含む平面距離約二九キロ、九時間三〇分）。

いきなりビッグイベントに挑戦することになった。きのう雨で一日休んだので疲れが残っていなかった

ためにその気になった。はじめは大峯山登山だけを考えた。昨年湯来町に住み始めて、部屋の窓から阿弥陀山から大峯山にかけての尾根の連なりを見るたびにやってみたいと思っていた縦走だが、とても大変で危険も伴うことだと思っていた。だからこの部屋で最初に着想した小説が、阿弥陀山から大峯山まで歩くといつて出かけたまま行方不明になる男の話であった。縦走に挑戦する前に、まず大峯山、阿弥

陀山をそれぞれ個別に登り、十分に可能性を確認する必要があると考えていた。

きょうも大峯山に登って、まだ時間的、体力的に余裕があつたら阿弥陀山まで歩くことも考えてみようと思つた。二五〇〇〇分の一では一応縦走できそうな道があるが、実際にそれがどのような道かはわからないし、それらの道が地図どおり現存するのかどうかもわからない。しかし、実際には昨夜の段階

です。すでに早寝をし、今朝は五時に起きて、朝食とゴミ出しをすませた。感情と体は理性を無視して、もうはじめからやる気になつていた。

六時三十三分出発。義父はまだ起きていないようだったので、行き先を書いたメモを郵便受けに入れておいた。

天気は晴れの予報だが、出かける頃は大峯山も、阿弥陀山も雲がかかったりのいたりという風だった。

窓から見る大峯山の向こう側、つまり西側から登ってこちら側に降りてきて、そこから連なる稜線を阿弥陀山目指して歩いて来る。最後に阿弥陀山の頂上からこちら側に降りるというコースである。

まず大峯山の登山口を目指して、県道二九二号線を歩いた。この道は、川角を出てから芸南ゴルフ場の前までずっと緩い登り坂で、ゴルフ場前で佐伯町に入るが、ちようどそのあたりが緩やかだが峠にな



っている。昨年の徒歩旅行でもたびたび経験したところだが、道路を歩いていて、峠が町境になつてゐるケースが多い。峠を越えると隣村というのは、昔話の世界となんとなく思つていたが、現在も生きてゐる原則のようだ。

檜原のコンビニでおにぎりと飴を調達した。水は家の井戸水を、昨夜からペットボトルに入れて冷やしたものを持ってきた。

檜原の交差点に大峯山登山口の方向を示す大きな標識があるが、ここからはちょうど近くに小さな峰が迫っていて、大峯山は見えない。しかし檜原を出てからは、大峯山の頂上が見通せるところは多い。大峯山は周囲に山々を寄せ付けないかのようにひとり聳える、いわゆる独立峰で、東端のピークに巨岩を持った独特の形と相まって一〇三九メートルという高さ以上に立派な山に見える。檜原を出たころは

頂上付近に雲がかかっていたが、いま雲はのいてい  
る。

家を出て三時間弱で登山口のある大峯ランドとい  
う別荘地の入り口についた。入り口には柵がしてあ  
って通行禁止となっているが、よく見ると小さく登  
山者を除くと書き添えてある。入り口付近は森閑と  
していて、別荘などあるのかと思つたが、中に入つ  
てみると十数件は建っていた。デラックスな別荘も

あつて、庭師が二人庭の手入れをしていた。別荘地  
が行き止まったところから登山道が始まる。このル  
ートは、大峯ランドから登山道に取り付くところか  
ら、大峯ランドコースと、「ひろしま百山」にある。  
これは大峯山の西の尾根を登るルートである。前述  
したように、わが家から見ると大峯山の向こう側か  
ら登ることになる。

登り始めて一時間弱で頂上エリアに着いた。巨大

な岩の上である。登り着いた岩も巨大だが、頂上はそのすぐ前にあるもう一つの巨岩であつた。いま私  
が立っている岩から下りるのも、頂上の岩に登るの  
も大変苦勞した。しがみついてよじ登らなくてはな  
らないのだ。頂上の岩にとりついたとき、登ること  
も下りることもできなくなつて冷や汗が出た。実は  
そのあと東側に下山したのだが、そのとき頂上の岩  
から下りるのも、大変怖い思いをした。次の足場が

無くて、岩の途中で躊躇しているところに蜂が顔を  
めがけて飛んできたりした。ここに妻を連れてくる  
のはちよつと心配だ。

私にとって大峯山は、自分の部屋から毎日眺める  
私の山という感じで、義父の家が湯来町の、大峯山  
を形よく眺められる地に出来たときから憧れてきた  
山である。その山にこんな形で歓迎されざる迎え方  
をされるとは心外であつた。実は、私は大学時代に

音楽サークルの仲間とここに来ている。女の子たちも何人かいたはずだが、そのとき特に危険だからどうこうした覚えはない。それにどの登山ガイドブックを見ても、大峯山の頂上が危険だなど一言も書いてない。昔の自分も含めて、若い者にとってはこんなのはなんでもないのかもしれない。

しかし、私にとっては怖い思いをして登った岩の頂上だったが、ほぼ完全な三六〇度の展望は圧巻で

ある。これは妻にも見せたい。ただ残念なことに、阿弥陀山、東郷山の方角の展望は近くの木のために完全ではなく、わが家を双眼鏡で見つけることはできなかつた。遠くから山の頂上が見えると、その頂上からも自分のところが見えるような気がしてしまふ。光の直進性からすると理論的には間違っていないが、直線距離で一〇キロ近くも離れていると、実際にはよほどの倍率の望遠鏡を使わなければ一軒の



民家を識別するのは難しい。また頂上の近くに少しでも視界を邪魔するものがあつたらもう見ることはできなくなる。

まだ弁当には早かつたので下山にかかつた。怖い岩場を何とかクリアして、急な下りを少し行つたところ、「長命の水」というわき水が鉄管で導いてある。空になつていたペットボトル一本に入れた。この水は冷たくておいしかった。

下り始めて四四分で県道四二号線の笹が峠に出た。ちようどそこが、湯来町と佐伯町の境になっている。ここの道路端でおにぎりを食べた。すっかり広がった青空に若葉が映えている。

ここから先は阿弥陀山への縦走だ。「ひろしま百山」には書いてないコースになるので、二五〇〇〇分の一の地図が頼りである。北側の小さな尾根の向こう側を、阿弥陀山の方に伸びる林道が通っている

はずである。地図を読んで、その林道に近道をしてわたるのに成功した。近道は未舗装ながら道幅が広く、わずか七分で目指す林道に出た。林道は舗装された新しそうな道路で、ガードレールも着いている。車は全く通らなかつたので、道の真ん中をゆつたりと歩いた。この林道は、大峯山を東に下りてきたあたりから、阿弥陀山方面にかけて連なる稜線の北側のかかなり高いところにつけられている。したがって

北側の展望が開けている。また見下ろす谷間には集落が一つ二つひっさり沈んでいる。

ここを歩くころ真つ青な空が広がっていて、若葉がきれいだった。また遠く県境方面の山々が一望され、雄大なパノラマである。振り返ると大峯山の特徴ある頂上が頭を出している。ここで風の音を聞いていると、見渡す限りの広い空間に自分一人いるという感覚に浸される。日常から遙かに離れた所に立

っているという実感でもある。自由であるが寂しくもある。また漠然とした恐怖感も混じっている。開放感と緊張感が入り交じっている。

地図の通り、送電線を二回くぐった。その間が約三〇分だったことから、地図上で阿弥陀山頂上に二時半ころ着けると計算した。その通りに行ければ、きょうの縦走は大成功である。

林道が稜線の南側に出たところで、右の方から送

電線が急接近してくる。地図にない送電線だ。それは前方の小さなピークの上に立つ赤白の鉄塔のところで大きく方向を変えて、阿弥陀山の方に向かっていく。今度は、南側が開けていて正面に杉並台団地、その向こうはるか遠方に広島駅の後方にある仏舍利塔が光っている。左前方には阿弥陀山が近々と見え、家から見るとようなスマートさはなく、緩やかにふくらんだほぼ平坦な頂上ラインである。

その後林道は左へ左へと曲がって再び稜線の北側に出た。途中気をつけているのだが、分かれ道も山に入る道も見あたらぬ。やがて全面通行止めの看板に出くわした。ところがその先にもきれいな舗装道路が続いているので、かまわず進んだ。しかし二〇分歩いたところで完全に行き止まりになった。昨年山陰の徒歩旅行で青海島を歩いたとき、島を一周しようとして、行けるかも知れないというあいまい

な情報を頼りに工事中の道路を歩いた。そのときと同じで、工事の先端から先はまったく道もなにもない山地であつた。きようは作業員が一人、重機で仕事をしていたので、現在地などを訊いたが、地元でないからわからないとの返事であつた。やむなく引き返すことにした。

五〇メートルくらい引き返したところで、阿弥陀山の頂上の方角だと思われる左側つまり南側に緩や



かな植林された斜面があつたので、まったくの勘であるが、尾根を目指して踏み込むことにした。めくらめつぼう上の方を目指して、しばらく枯れ枝を漕いでいくと、木に巻いたビニールテープの目印と、国土調査と書いた杭が続いている所に出た。それをつたどっているうちに、何となく踏みつけ道の跡も見えてきた。頂上方面らしい兆しはいっこうに現れないが、「憩いの森遊歩道」という看板が落ちていた。

頂上に近いと思つたが、テープの目印は植林帯の中を左下へと続いている。ちよつと残念ではあつたが、このまま下山になつてもいいことにして目印をたどつた。すでに午後二時半近くになつていたので、すんなり頂上に出られなかつたときのこととも考えなくてはならない。

植林帯の斜面を、目印を頼りに下りるのだが、かなりの急傾斜だ。積もつた枯れ葉の下に、苔の付い

た石ころがあり、滑って足を挫きそうになる。粘土質の地面も滑りやすく非常に歩きにくい。わが阿弥陀山がこんな風では登山者が遠のくと思つた。

急斜面を一〇分少々下つたら、別荘風のしやれた民家があるところに出た。阿弥陀山の東斜面にある湯来ハイランドらしい。勘が当たつていて本当にほつとした。当てずっぽうに山に踏み込んでから四分である。また大峯山を下山し始めてからいつのま

にか四時間経っている。

もう少し下りたところで、車を停めている人に訊くと、この道を使って阿弥陀山に登る人はほとんどないとのこと。一般的な登山道はもつとずっと南の方、つまり大森に近いところにあるそうだ。またこの地域は、湯来ハイランドではなく黒谷であることが電柱の表示でわかった。阿弥陀山の頂上からはずいぶん北に寄っている。さつき頂上を目指すことに

しなくて良かった。ちよつとやそつとでは頂上にたどり着けなかつたはずである。

それから四三分歩いて高压線をくぐつた。ずっと以前まだ私が名古屋近郊に住んでいたころ、湯来に帰省したときに娘とここまで散歩したことがある。

湯来ハイランドの中を通過して、家に着いたのは十六時二分。朝六時半に家を出てから九時間半の行程であつた。

地図でききよう歩いた足跡を、詳しく計測すると、水平距離で約二九キロであった。もちろんこれには山道が多く含まれている。

家の窓から大峯山と阿弥陀山をあらためて眺めた。登ってきた山を振り返ったときのいつものような満足感を感じなかつた。むしろ、

「生意気な顔しやがって」

という気持ちで働いた。怖い思いをさせられたり、阿弥陀山には頂上踏破を阻まれたりしたためだろう。あす、もう一度こんどは阿弥陀山側から道を確認めよう。でもそれで道がわかったとしても、もう一度縦走することを思うと、大峯山が怖くていやな感じがしてしまふ。

## 第四日「縦走と周辺ウォーク」

阿弥陀山（あみだやま、八四二メートル）

五月十日（木）（平面距離約二二キロ。八時間）

きのう、阿弥陀山の頂上を踏めなくて、大峯山阿弥陀山縦走は、距離的には十分縦走に見合うだけ歩きながら不完全なものになった。きようは阿弥陀山頂上を通って、きのう歩いた林道に出る道を確認



ることが目的だ。

実は、家のすぐ近くの山ということもあつて阿弥陀山登山は「軽い登山」と考えていた。なにしろわが家から阿弥陀山の頂上まで直線距離は二キロしかない。しかし、きょう一日を終えてみると、決して「軽く」はなかつた。それは登山後のウォークがハードだったこともあるが、阿弥陀山登山そのものがかなりハードなものであつた。

阿弥陀山は、「ひろしま百山」に入っていないが、約八〇の山と二〇の溪谷などが紹介されている加藤武三著の「広島をめぐる山と谷」（山毛櫨山荘刊、第一一版昭和四七年発行）には紹介されている。

「軽い」と思っていたので遅めの出発であった。湯来ハイランドから登山道にとりつくことは、きのうの帰り道に現地で訊ねてわかっていたつもりだった。それなのに迷って一五分ばかりロスした。時間だけ

でいうと一五分は大したことではないようだが、歩きの場合それは一キロ以上の距離を無駄に歩くことであり、体力消耗の点から見てもばかにならない。

登山道は尾根筋ではなく、家からも見える東斜面の植林帯を登る。阿弥陀山を南の方から見るとわかるが、頂上はなだらかな高原状になっているが、東斜面は四五度くらいの角度で急落している。そこを登るのだから当然急登である。途中掴まって登るた

めのワイヤーが設置してあるところもある。私は亀のようなペースで登ったが、それでも後半は十メートル行つては呼吸を整えるという状態であつた。登り始めてからずっと檜の植林帯の中だったが、残り三割くらいになつて雑木林の若葉の中を歩くことになつた。霧囲気はがらりと明るくなつたが、展望は最後までできなかつた。下の方に国道が走り、街並みがあることが、自動車の音や木の隙間から見える

ものでわかるだけである。登山道そのものは、きのうの黒谷ルートに比べるとずっとよく整備されている。

登り始めて四五分、家を出てから一時間四三分で八三七メートルの頂上に着いた。頂上にはコンクリートの展望台小屋があった。あまりきちんと管理されているとは言いが、とにかく小屋の屋上展望台にあがると、大峯山、大野権現山、野貝原山、極

樂寺山、その向こうに宮島弥山、東側には家の裏山、東郷山等がよく見渡せる。ここから見る大峯山は形がいい。特に南に引く裾野がすばらしい。しかし麓の街並みやわが家は木が視界を遮っていて全く見えない。大峯山もそうであつたが、頂上に登つたら鏡に光を当ててわが家と交信すると面白いと思つたことがあつたが、それはできないことがわかつた。双眼鏡でわが家を確認することもできない。

ここに、いまは介護施設にいる義母が友人と登ったことがあるらしい。二十年以上前のことだろうか。いまの私くらいの年だったのだと思う。

小さな蠅が顔の周りに寄ってきてうるさいので、早々に次のピークに向かう。次のピークというのは八九一メートルのマイクロウエーブのアンテナが立っているピークである。遠くから阿弥陀山をそれと見分けるときの目印になる山頂建造物だ。それは阿

弥陀山の展望台から見ると、すぐそばに見えており、標高差もないので簡単に行けそうである。

若干の下りと登りがあるが一〇分もかからないで着いた。ここも大きな木々に囲まれた中に二つの鉄塔があるだけで、展望は全くきかない。マイクロウエーブのアンテナは、大きなコンクリートの建物の上に建っている。それを囲った金網の西の端から車道がついている。その車道の右側に山道がありそれ



を行く。

間もなく送電線の鉄塔のそばを二回通る。このあたりで、一度マイクロウェーブからの車道が左手に接近して、すぐ別れていく。次の機会に一度この車道を辿って、きのうの林道との関係や、どこに降りつくのかを確かめてみたいものだ。二五〇〇〇分の一では、このあたりに幅一・五メートルから三メートルの道路という印で二本か三本に分かれた道が書

いてある。

植林帯や雑木林の中の道を、ビニールテープの目印を頼りに歩いた。テープの目印が見つかりにくいところもあり、そんなときは最後のテープが巻いてある木のそばをあまり離れないようにして、木の間を透かしながら次のテープを探す。たいていは、本来赤いはずのテープの色が褪めて薄いピンク色になって小さな枝に結びつけてあつたりするのが見つか

る。それも見つからないときは、国土調査の赤と白の杭を探す。

途中二、三箇所で、「憩いの森遊歩道」の看板が地面に置いてあつた。きのう見た同じ看板も、捨ててあつたのではなく、置いてあつたのかもしれない。「遊歩道」というには荒れすぎている。またきのう行き止まりになつていた所で聞こえていたのと同じ重機の音が右下の方から聞こえてくる。きのう歩い

たところは、ここからあまり離れていないのかもしれない。そう思っていると、黒谷方面と小さく書いた分かれ道に出会った。やはりこの近くを歩いたことは間違いない。

マイクロウェーブのピークを出てから一時間弱で、九〇七メートルの第三のピークに来た。「広島をめぐる山と谷」には、このピークは草原で展望が良いと書いてあるが、いまは木が茂っていて展望は全くな

い。「広島をめぐる山と谷」が書かれて三十年経っている。その間に当時無かった木が生えて成長したのだろうか。そのあたりにある木の幹の太さなども気をつけて見て置けばよかった。地図上の平面距離は、阿弥陀山の頂上展望台からマイクロウエーブピークまでが約五〇〇メートル、そこから九〇七メートルピークまでが約一・五キロである。いま三つのピークを縦走してきたが、それら三つの中では阿弥陀山

頂上とされている最初のピークが一番低い。建設省  
国土地理院の三角点はその最初の八三七・一メートル  
ピークと、この九〇七・六メートルピークにある。  
建設省は最近、国土交通省という名前になったが、  
当然ながらここはまだ書き換えられていない。これ  
が書き換えられるのはいつたいつのことになるの  
だろうか。

ここに廃止されたトイレがたたんである。登山者

用の休憩所でもあつたのだらうか。トイレには汚物などはまったくないので臭くはない。なぜかここも蠅が多いが、ちようど十二時なので弁当を食べる。湯来町の十二時の時報が聞こえる。

この九〇七メートルピークからは、右と左に下山道らしいものがあることがテープの目印でわかる。南側をとることにする。植林帯を下り始めて一〇分

で、右下すぐの所に、真つ白なガードレールが見えた。きのう行き止まりに向かつて歩いた林道だ。すぐにもその道に下りて行けるが、いまは林道からの正式な山道への入り口を見つけることが目的なので、このまま目印に従つて山道を歩く。

九〇七メートルピークを下り始めて二四分で赤白の大きな鉄塔の下に出た。結界内は芝生で気持ちがいい。結界というのは送電線鉄塔の真下のきれいに



整地されたエリアのことで、銀林みのる著の小説「鉄塔武蔵野線」の言葉を借りたものである。ここは東郷山、阿弥陀山そして北西の山々の展望がいい。少しここで大の字になって休む。白い雲が流れて、鉄塔が動いているみたいだ。風がさわやかなので、直射日光を受けているが気持ちがいい。いま私がここにこうしていることを知っているのは神様だけだ。気持ちがいいが、この孤独感に長くは耐えられない

ような気がする。

結界をまっすぐ横切ったところに、山道の続きがあつた。一分で次の鉄塔の結界に来た。これも赤白の鉄塔である。この鉄塔はたしかきのうも見ている。南から来た送電線を大きく東に向きを変えて阿弥陀山の方に送り出しているあの鉄塔である。なおこれらの鉄塔は平成四年修正測量の国土地理院二五〇〇〇分の一「川角」には載っていない。すぐ一〇

メートルくらい右にきのう歩いた林道が通っている。それでも林道に出ないで山道を行く。しかし今度は二〇メートルも行かないうちに、結局林道に出てしまった。つまりここが山道と林道の接点なのだ。いま見るとはつきりと山道の存在がわかる。しかし、阿弥陀山方面といった案内の類は全くない。きのうは左側を歩いていたのか、何か別のものに気を取られていたのか、とにかく見逃したということだ。こ

こは林道の通行禁止のバリケートから百メートルくらい入ったところである。まあ、知っていない限りこの山道の入り口を見つけるのは難しいと思つた。

しばらく林道を歩く。これできのうの縦走が、きようとのあわせ技で繋がったことになる。ちよつとした感動がある。

私は、ある男が自分の家の窓から阿弥陀山から大峯山まで連なる山並みを見ている中にどうしても行

つてみたくなり、ある日、その魅力的な山々に誘い出されるように一人で縦走に出かけるが、そのまま行方不明になるといふ事件で始まる小説を書きかけで寝かせてある。そのことは以前ちよつと書いた。それを書くときに想像した山中の様子に比べると、この二日間に見た縦走路は明るく、距離も片道なら半日で行き着く程度である。天気の良い昼間では遭難のイメージに結びつかない。そういえば、三〇〇

○メートルのアルプスでさえ、快晴の中ではのどかなものである。しかし、一旦荒天になると、アルプスならずともすさまじい恐ろしさとなるだろう。霧、雨、雪、風のどれもが恐怖の舞台を演出することになる。それに夜は、仮に満月の月明かりがあつても、ここに一人立つとしたら、凍り付くような孤独感に襲われそうだ。その小説を完成させるまでには、雨の日、雷の日、台風の中、雪の日にもここに来るべ

きかもしれない。夜も体験する必要があるだろう。

林道の右手、つまり北側の比較的近いところに、高さはいま歩いているところと同じかむしろ低い位なのだが、堂々たる山容の山がある。きのうも気になった山だ。地図で確かめた。どうやら八三八メートルの滝谷山らしい。いま歩いているところが七五〇メートルくらいだから、少しここより高いことに

なる。九州の高千穂を思わせる形の良い山である。

また前方間近になつた大峯山が、

「きょうも来るか」

と誘つているようだ。

「お前みたいに人を寄せ付けたがらない山に、誰が行くか」

と心でつぶやきながらも、あれぐらいの難関は、いつか手の内にしてやりたいとも思う。だがきょうは



行かない。

このまま林道を歩き、きのう歩いた道を逆にたどつていけば、笹が峠で県道四二号線に入ることができきる。しかし地図によると、笹が峠からきた四十二号線が左手の峰を越えた向こう側を通っているはずだ。二本くぐる送電線の間あたりにも、そこへの近道があることになっている。何とかその近道を見つけたいたい。きのう送電線間が三〇分だったので、一五

分くらい歩いたあたりから左側を注意して探した。最初それらしいと思つた所は、棘のある枝が折り重なつていて全く前進できない。使われていない道はこうなるのかと諦めかけたが、すぐ先に別の入り口が見つかった。林道からは、五メートルくらいよじ登つた高いところから始まっているのだが、入り口の両側の木には赤いビニールテープがしつかり巻いてある。最初よじ登ると後は植林帯をテープに沿つ

て下っていく。途中右前方のピークに登る道にもテープの印があつたが、いまは下りの方のテープに従う。

近道に入ってから三〇分で目指す県道四二号線に出た。県道に出る直前に山小屋風の家があり、私が通りかかったときに、若い男の人が出てきた。挨拶してこの辺の道路のことなどを訊いた。私がきのうときよう、自分の足で得た知識以上の情報は得られ

なかつた。考えてみると、阿弥陀山の登山道に入つてから、四時間ぶりに人を見た。

県道を二五分歩いて、平谷というところに来た。

目の前に見上げるように大峯山がそびえ立っている。きのう登り始めた下川上は大峯山の西麓の集落であり、ここ平谷は東麓の集落である。あの頂上の巨岩のあたりをこちら側にしてニョキツと獅子頭のように聳えているところは壯観である。下川上からの台

形の山容よりも、こちらからの方がずっと見応えがある。

この後はひたすら車道歩きである。はじめは、さらに東の湯来町峠地区まで渡って行き、杉並台に東側から入って来るといふコースを考えたが、いまの時間と足の疲れからそれは断念した。

平谷からは、すぐに県道四二号線を離れて町道上重光内野線を内野、大山、八幡原、重光と通って、

十五時五十八分にきのうの朝大峯山登山口目指して歩いた県道二九二号線に出た。きのうはこの二九二号線で、この交差点を通り過ぎて檜原まで行つたのである。

湯来南小学校を過ぎたところから左に入り、迷いながら体育館の裏手下の方を通つて砂谷牛乳の工場敷地内に出た。それから牧場の横を通つて、湯来町企業団地経由で帰宅した。帰着は十七時五分。約

八時間の行程であつた。

足はかなり疲れたが、限界ではない。その証拠に体育館のあたりから下りてくる道では、歩道と車道の境にしてあるブロックの上をバランス歩きの練習をしたくらいだから。

留守番電話に、妻から予定通り新潟に着いたとの連絡が入っていた。東京で朱鷺たちと食事をしてか

ら、最終の「のぞみ」で帰ってくる。広島で乗り換え、五日市に着くのは〇時十分ころだ。迎えに行く。

いつか登りたいと思っている山は、憧れをもつて眺める。一方登頂を果たした山は、これまた独特の親しみを感じながら眺めるものだ。私はこれまではいつもそうであった。



「あー、あの山の頂上に立ったのだ」

との思いが、その山を見るたびに蘇る。行程が大変だった場合でも成就感があつて、

「われながらよくやった」

と思えたものだ。しかし、きのうの大峯山のように後で眺めたとき、何となく憎々しい気持ち湧くというのは初めてだ。

しかし、きょう再びその周辺を歩き回ったことに

よつて、見るのも忌まわしいという気持ちほうすらいだ。阿弥陀山に対しては、きのうは拒まれたという恨めしさがあつたが、きようは親しみに変わつてきた。

大峯山は恐ろしい山だが、頂上は素晴らしい。一方阿弥陀山は家からの近さは文句ないが、頂上の魅力に乏しい。

第五日「登山と宮島北半周」

宮島弥山（みやじまみせん、五二九・八メートル）

（「ひろしま百山」によると、《宮島弥山》というものが正式名のようにだが、この文中では一般に言い慣らされているように単に《弥山》と呼ぶことにする。また弥山の西側にある五〇九メートルのピークのことを、「広島をめぐる山と谷」では《絵馬嶽》として

そこに駒ヶ林があるようになっていた。しかし、二五〇〇〇分の一や「ひろしま百山」では絵馬嶽の呼称はなく、ただ駒ヶ林としてある。私も駒ヶ林を使うことにする。）

五月二十一日（月）（平面距離約一五キロ。宮島口まで車、海峡は連絡船。宮島棧橋出発から棧橋帰着まで約五時間三〇分）

きのうの日曜日は、三時半におきて朝食を食べ、四時半に車で家を出た。関空から午後の便でウクライナに出発する妻を、広島駅に送るためである。そのあとオーケストラの練習場の駐車場で昼まで休んで、午後いっぱいオーケストラの練習に参加した。今朝はその睡眠不足のためか、体が重い。疲れたその日にぐっすり眠れないのが、私くらいの年令の特徴である。しかし、きよようの宮島北半周は歩く距離

が短いから大丈夫だろう。

義父を廿日市の病院に送ってからなので、山歩きとしては遅い出発となった。宮島の栈橋には十一時に着いた。まず宮島全島の地図を松大連絡船の売店で探した。珍しいことに二五〇〇〇分の一が置いてある。宮島は「厳島（いつくしま）」に島のほとんどが載っており、ほんの一部欠けた南端部が「阿多田島」というのに載っている。売店にはもう一枚五〇

〇〇〇分の一の「巖島」というのも置いてあった。これには宮島全島と能美島江田島のほとんどが載っている。この三枚を買った。さらにその売店で、役場で二五〇〇〇分の一の大きさを宮島を一枚に載せたのを売っていると聞いたので、役場にも寄った。役場では確かに二五〇〇〇分の一の大きさを全島が一枚に収まった地図を売っていた。ただし、国土地理院の二五〇〇〇分の一をそのままコピーなどに

よつて全島を一枚に納めたのではなく、国土地理院をもとにしながらも、若干独自の情報も加味されて  
いるようである。よく見ると道路の有無などが違つ  
ている。さきほど棧橋の売店で買った正規の二五〇  
〇〇分の一の方が発行は新しいが、とにかくこれも  
買った。

役場に寄つた収穫は、この地図よりも、宮島一周  
に関する情報が得られたことである。



たまたま対応してくれた若い男性が、彼自身宮島一周をしたことがあるというのである。彼によると、南の方の海岸線を歩くのは相当厳しかつたという。厳しいというのは距離が長いだけでなく、道が繋がっていないというのである。特に東海岸の青海苔浦（あおのりうら）の南、養父崎浦、山白浦あたりは大変だったそうだ。また西側も多々良潟より南は道がとぎれとぎれで、彼は道がないところでは、干潮

を待つて浜を歩きながら何とか一周したという。それから岩船岳への道も行く人が少ないので、草に覆われている可能性が高いとも言っていた。

きょうの北半周はそれほど問題なさそうだが、この計画は次に実行する南半周とセットで宮島一周が完成する。人里に近い山の中なら、道なき道に入り込んでも、動けなくなるようなけがでもしない限り大丈夫だが、人里から離れた山中のひとり歩きはや

はり用心すべきであろう。宮島の南側には山中はもちろん、海岸線にも民家はない。それに道なき道は時間を食うので無理ができない。事前にどんな具合かは確かめておきたい。

さて、南半周ができるかどうか微妙な情勢となったが、きょうは北半周である。まずきょうを完成させなくては始まらない。

大元公園をめざして歩き始めた。弁当は、途中コンビニかなにかでおにぎりを買うことにする。大元公園で街並みは切れるが、その少し手前で驚異的な美しさの女性に出会った。女性は赤ん坊を抱いていたので、その子の若い母親なのだろう。通り過ぎてからあまりの美しさについて振り返ると、女性もこちらを振り返った。一瞬視線が合ったが、大きくて印象的な目であった。

思えば、高校時代に憧れた人がいまも住んでいる島だ。神秘的な美しさの女性が、彼女と繋がりがあるかのような錯覚さえ感じる。

島内では、おにぎりを買うようなコンビニが、少なくとも表通りには見つからなかった。たしか弥山頂上のレストハウスで食事ができたと思う。昨年東京から訪ねてくれた友人と登ったときの記憶である。

その記憶を信じてきようは頂上で昼食にすることに  
して、弁当なしで登り始めた。

大元公園を歩き始めてすぐ、まだ公園の区域内に、  
右の方に行く山道があり、岩船岳方面と書いてある。  
その下に、落書きとも、親切で書き足したものとも  
とれる風に、

「整備済み、おすすぬめ」

と書いてある。二五〇〇〇分の一にはない道である。

しかし、先ほどの役場の職員は、岩船岳への道は荒れていると思うと言っていた。彼がどの道のことを言ったのかわからないが、この

「整備済み、おすすめ」

はいたずらだろうか。きょうは行かないのだが、次回のために大いに気になる。

この分かれ道は、家に帰ってから「ひろしま百山」の宮島の項で調べたところ、弥山から奥の院経由で

降りてくるコースの帰着点となっている。その途中に岩船岳の方に行く分岐があるのだ。

弥山は遠くから眺めると全山よく木に覆われているが、一箇所大きな岸壁が弥山の南側にある駒ヶ林というピークの西面に見える。しかし実際に頂上近くに来ると、そのピークだけでなく山全体が岩でできてくるような感じである。その岩肌を隠している



木々は、岩の割れ目に根を張って伸びている。これは駒ヶ林も弥山も同様である。登山道は数々の巨岩のそばを通るが、そのいくつかには祠がまつつてある。

きょうは平日だからだろう、誰にも会わない。弥山頂上までに出会ったのは、頂上が近くなつてから、山道のすぐそばでじつと私が通り過ぎるのを、首だけまわして見つめる大きな鹿一頭と、ひとり歩きの

女性だけであつた。女性は服装からロープウエーで来たのだと思う。頂上展望台から少し離れたところを歩いていた。

展望台には、多くの鹿と、何組かの登山客がいた。聞こえてくる会話からほとんどがロープウエーで来たことがわかるが、ひとり中高年のおじさんは、展望台上でさかんに汗を拭いていたし、山靴を履いていたので歩いてきたのかもしれない。もつともロー

プウエイの終点からでも、約一キロの登りの山道なので、歩きようによつては大汗になることもあるかもしれない。もう一組中高年の夫婦が展望台で弁当を開いていた。若い女性の二人連れが展望台に上がつていくと、男の方が盛んに話しかけ、冗談を言つて大声で笑つていた。そのあと私も展望台に上がる時き夫婦のそばを通つたので、こんにちはと声を掛けたが、その男は面倒くさそうに返事をしただけだ

った。

きようは霞んでいて遠望がきかない。比較的海岸線に近い経小屋山、大野権現山、野貝原山、極楽寺山はわかるが、それより奥の大峯山、阿弥陀山、東郷山はうつすらと稜線が見える程度であつた。

展望台の階下のレストハウスでは、シエルパのように日焼けしたおばさんがひとりで雑誌を読みながら店番をしていた。月曜日だからであろう開店休業

状態であつたが、うどんができるといふので注文した。

レストハウス内に、宮島に関する写真が何枚も額に入れて掲げてある。その中に「ハチクマ」と題した、鳶のような大きな鳥が一羽滑空する写真があつた。先日極楽寺の頂上で聞いた話の通りで、「ハチクマ」で間違いないらしい。そういえば、あのととき話してくれた人は、

「弥山にも写真があるところを見ると、あすこにも飛来するのだろう」

と言っていたが、きつとこの写真のことだったのだ。うどんの代金を払うときに、おばさんに東海岸に下りる道を訊いてみた。私は、二五〇〇〇分の一で奥の院から東に下りる道を考えていたので、その道について訊くと、それはすつかり荒れていると言う。先日若くて強そうな四人連れの男の人がその道を行

ったが、シダに覆われてほとんど道がわからなかったらしいと教えてくれた。特にきようは止めといた方がいと付け加えた。この最後の言葉は、はじめどいう意味かわからなかったが、雨が降りそうだからと言うことが、その後歩いているうちにわかった。

このおばさんは、私が店に入っっていつて、「何か食べるものできますか」

と訊いたときも、うどんを運んできたときも、かなり無愛想に見えたが、道を訊くと急に人なつこい表情になつて、いろいろ説明してくれた。人は、言葉を交わすべきものだ。

結局おばさんのアドバイスもあつて、ロープウェイ沿いに行き、かや谷という途中駅から東に下る道をとることにした。

ロープウェイの山上の終点獅子岩駅付近には、至



る所に猿に対する注意の看板が立っている。猿が取りに来るからこの付近で弁当を開くなと書いてある。手提げなどをひったくられないようにとの注意書きもあった。きようは猿の姿は一度も見なかった。私は弥山の頂上にはずいぶん何度も来ているが、ロープウェイ駅に来たのは初めてである。ここにも観光客が何組かいた。弥山はいつ来ても、西洋人の観光客が多い。

そこから、ロープウェイと同じ方向に、細い尾根道を下った。かや谷駅までは踏み分け道がはつきりしていた。かや谷駅でコンクリートの通路をくぐつて、いよいよ東海岸への下山道に入る。

はじめのうちは踏み分け道があり、大砂利××と  
いうお地蔵の所まではよかった。しかし、その後が大変だった。急な斜面で道がなくなった。それでも

初め少しだけテープの目印があつたが、それもすぐになくなつた。藪歩きの途中から雨が降り出した。沢では、足が滑つて転んだ。幸い汚れただけでけがはしなかつた。

藪の斜面を下るとき、あちこちに人が歩いたような、土や枯れ葉が乱れたり、滑つたりしたような跡があつた。おそらく誰かが私より先にここを通つたのだと、少し心強く感じたものだ。しかし、後で考

えると、あれは鹿の通った跡らしい。鹿は、信じられないような凄惨な急斜面でも平気で走るのをこの後なんども見た。

一時間も藪の急斜面を下った後、突然軽四が通れそうな道に出た。それで安心したのも束の間、その道は入り口に嚴重に施錠された金網の囲いの中に入っている。しかたなく、金網に沿って再び藪を歩く。このようなことを三回繰り返して、かや谷駅を出て

一時間半でやつと海岸線の町道に出た。それは、大砂利の集落よりも少し北に寄つたあたりであつた。それからは、淡々とした海岸線の車道ウォーキングである。

最初に町道に出たところは腰細浦という砂浜の海岸のやや北であるうと思われる。これは、私が宮島の北半周を思いついたきっかけとなつた「広島をめぐる山と谷」にも同じ場所に出るように書いてある。

それによると紅葉谷道から分岐して東に下るとなっているから、ロープウェーとの関係は書いてないがきよりの道のことをいつているようだ。また、「ひろしま百山」にも、弥山登山の《かや谷コース》として、「かや谷駅をくぐる・・・」とあるから、獅子岩駅からかや谷駅までは紹介されているコースの一部である。だが、いまの二五〇〇〇分の一にはこれらの道はどれも載っていない。

町道に出てからは入浜、鷹巢浦、包が浦、杉の浦を経て棧橋までひたすら舗装道路を歩くことになる。この道路は、浦があるところでは海岸のレベルまで下り、浦を過ぎると峠を越すために高いところに登っていくという繰り返り返しであつた。棧橋まで約八キロの道のりは、休みなしで一時間四五分かかった。この海岸線の道では至る所で鹿を見かけた。人気のない沼地のような所で、私の足音に驚いて、急に

四、五頭の鹿がダダツと走り出したのには驚かされたが、野趣満点であつた。山陰海岸で、崖の上の道を歩いておるとき足下の木の中から鳶がバサツと飛び立つたのに驚かされたことがあるが、それ以上であつた。

浦々は、夏は海水浴で賑わうのだらうが、いまは静まり返つてゐる。きょうも天气がよければ、裸になつて砂浜に降りたいようなきれいな海岸である。



しかし、周辺は客が散らかした汚れも目に付く。

包が浦は、とても立派なリゾート地になっていた。テニスコート、野球場、芝生の広場、コテージなどがそろっている。広場では鹿が草を食んでいた。

コテージの玄関前の水道で、藪歩きで汚れた腕や顔を洗い、ほっとした気分になった。と同時に成就感による感動とも、あることが終わったときの寂しさともつかないものが胸にこみ上げてきた。

雨は、あの急斜面の藪下りあたりで降り出して、ずっと続いたが、大降りにならないのはありがたかった。リュックの雨カバーはしたが、人間は最後まで雨具なしで歩いた。

四十年くらい前、大学の友達数人とテントをかっいで宮島を歩いたことがあった。夜暗くなって崖の上を歩いたこと。そのとき遙か下の方に、月明かり

で海岸に寄せる波が白く輝いているのを見て、足がすくんだものだ。懐中電灯を頼りに砂浜に下りて、満潮時の潮位を気にしながらテントを張った。

その時のコースははつきりしないが、キャンプしたのは多々良かあるいは大江浦あたりで、翌日山を越えて大砂利の開拓村に出たのを覚えている。大砂利に越える道は、途中からだったのかどうか詳しくは覚えていないが、案外広かったような記憶がある。

当時は、いまのように北海岸を回る車道ができてなくて、大砂利に行くには、山越えしかなかつたので、荷車くらいは通れるようになっていたということも考えられる。それがいまの奥の院までの車道と関係があるのかもしれない。開拓村にきょうのような、柵で囲まれた設備などなかつたように思う。東海岸に出てからの北回りはたしか道なき道で、海岸線を歩けなくなると山に入り、沢を下つてまた浜に出る

という難行の連続であつた。沢下りで仲間の一人が足を滑らせてかなり滑落したときは肝を冷やした。

私はこの難行の途中でリュツクの紐が切れて、これまた難儀をした。満州で父がコウリヤンの買い出しに使つたところからの、古い大きなリュツクであつた。いま、舗装された北回りの町道歩きは、当時とは隔世の感があるが、弥山から東海岸への下山は当時を思い出させる難行であつた。

きようは疲れた。道がわからなくなるのは緊張するものだ。それにきのう三時半起きで妻を送った寝不足もあつてか、きようは本当に疲れた。

## 第六日「縦走」

駒ヶ林（こまがばやし、五〇九メートル）

岩船岳（いわふねだけ、四六六・六メートル）

御床山（みとこやま、三五四メートル）

五月二十五日（金）（平面距離約一九キロ。宮島口まで車、海峡は連絡船。宮島栈橋出発から栈橋帰着まで約九時間）

月曜日に続いて今週二度目の宮島である。きょうは早めに家を出たので、八時半過ぎには宮島に上陸した。本当は三十年前のガイドブック「広島をめぐる山と谷」に紹介してあつた、宮島南半周がしたかつたのだが、先日の役場職員の話から、山道と海岸線の道路事情に関する十分な調査が必要と考え、きょうはとりあえず弥山から岩船岳までの縦走をすることにした。



二五〇〇〇分の一で見ると、御床山を南に下つて南端の海岸に出てから、ずっと海岸線沿いというわけではないが、一応多々良まで道が続いているように書いてある。ところが役場で買った二五〇〇〇分の一ではそのような道が続いているように見えない。一度多々良から海岸沿いに行ける所まで歩いて確かめてみたいと思う。

きょうはよく晴れた。宮島棧橋から回廊のあたりには修学旅行の生徒がいつぱいだ。小学生から高校生まであつて、それぞれの団体のそばを通るときに聞こえてくる声の周波数が違うので、目をつぶつていても小中高の区別がつく。教室での教材は小学校と高校では当然違っている。しかし、修学旅行ではどちらも宮島を見学する。授業にたとえば、小学生も高校生も平家物語を教材にしているようなもの

だ。しかし考えてみると、世の中のほとんどすべて  
のことは年代に関係なく、身の回りに起こったこと  
を見聞きし体験しているのだから、むしろ教室の授  
業のようにそれぞれの年代に合っていると思われ  
るものを切り取って学習する方が特殊なのかもしれ  
ない。

制服の学校もあれば私服の学校もある。はしやぎ  
回る子、淡々と列について歩く子、ここまで来て先

生に小言を言われながらふてくされる子といろいろだ。

「だからあ、ちやんと謝ったじゃん」

と先生に口答えする女生徒の声も聞こえてくる。先生の方も、何人もの生徒に腕にぶら下がられんばかりに囲まれながら行く先生もいれば、前も後ろも生徒から離れてひとり歩く先生までいろいろだ。こうして仕事中の先生を見ると、三〇の歳までやった自

分の教員時代を思い出す。残念ながら私の場合、そのほとんどは楽しい思い出ではない。

大元公園から弥山までは、月曜日の北半周のときと同じ道に行く。登り始める前に大元公園のトイレで大をした。これできょう唯一の懸案が解決した。おにぎりは、月曜の経験から、島に渡る前に宮島口のコンビニで入手した。

睡眠不足だった月曜日に比べると体調がいい。駒ヶ林の手前にある岩屋の大師にも寄った。弥山のルートでは、大きな岩の陰などに何かを祀つてあるところが多いが、その中でも岩屋の大師は一見の価値がある。巨岩が別の巨岩に倒れかかって、二〇畳ほどの岩のホールができています。高さ一・五メートルくらいの岩天井の中は暗くひんやりしている。奥の方に何かが祀つてある。

駒ヶ林に登る分岐点は、昨年東京から来た友人と登ったときにも、今週の月曜日にも通った。しかしいずれも駒ヶ林には登らなかつた。昔も行ったことはないと思うので、きょうが初めてである。

標識のある分岐から僅か五分で駒ヶ林の頂上に着いた。頂上は岩峰である。西側はさつき登ってくるとき下から見上げた絶壁で、高さ七〇メートル、傾斜は七〇度あると「広島をめぐる山と谷」に書いて

ある。ほとんど垂直に立ち上がっているように見える。頂上は西側だけでなく周囲はみな滑り落ちそう  
で、端の方に行くのが怖い。

ここは毛利と陶の宮島合戦古戦場のひとつである。陶晴賢を大元に逃がしてから、その部下がここに立て籠もって、二日間持ちこたえたが討たれたと案内板にある。これは家に帰ってから史書で確かめたことだが、晴賢がここ駒ヶ林まで来たというのではな



い。晴賢は大元から、多々良よりさらに南の大江浦まで逃げたが、結局島外脱出を諦めてそこで自刃している。大元から大江浦は四キロ以上あり、潮が引かないと海岸線は歩けないし、浦と浦の間は崖になっている。介錯した部下が晴賢の首を隠したため、毛利側がそれを見つげるまでに数日を要したそうだ。囲碁は囲みとつた面積の広さで勝敗を競うが、将棋は相手の王を先に取りさえすれば勝ちである。戦国

の戦は囲碁よりも将棋に似たところがある。もちろん庶民は、戦略上町を焼き払われたりするので戦火の影響を受けるが、このころの戦はつまるところ大将同士の戦いであつたような気がする。

それはともかくとして、当時の戦は大変な体力消耗の戦いだつたようだ。私はきようしつかりした登山靴で足元を固め、荷物も軽くりユツクにまとめ、整備された登山道を大元から駒ヶ林まで一時間一五

分かけて登つてきた。当時甲冑に身を固め、武器を  
持つての行動は想像を絶する。履物は草鞋だったの  
だろう。毛利の兵は、それに三日分の食料を携帯し  
たとある。しかも敵と出会えば殺すか殺されるかの  
せつぱ詰まった状況である。疲れたらゆっくり水を  
飲みながら呼吸を整えるというような登山ではない。  
当時すでに弥山の神社はあったから、それなりの登  
山道はあったと思われる。しかし、生きるか死ぬか

の戦いが、登山道に沿つてのみ行われたとは思えない。敵兵に切られるのではなく、崖から転落して命を落としたり、負傷したりする兵も少なくなかつたのではないだらうか。いま私が執筆中の「ある兵士の物語」は、雑兵たちが毛利元就の本城郡山での籠城戦の中で生きる姿を描くものだが、ここを歩いてみると彼らが山中でうごめく姿を想像することができきる。

歴史に思いをはせるのも感慨深いものがあるが、ここからの北西側の展望が素晴らしい。吉和冠山、大峯山、阿弥陀山が遠近はともかくちようど等間隔に並んで見える。さらに右の方を見ると、東郷山、窓ヶ山、向山がやはり等間隔に並んで見える。

この岩の頂上にはクマバチが多い。うなりをあげて飛び回っている。だが攻撃してくるけはいはない。

鳶が滑空している。ハチクマかもしれない。

駒ヶ林から五分で、弥山と奥の院との分岐に出る。きょうは先が長くなりそうなので、弥山頂上は省略して奥の院の方に進む。一五分ほど鬱蒼とした大木の中の道を下ると奥の院の界限に出た。やや明るく日が漏れているのは、台風か何かで多くの木が倒れたせいもあるようだ。しかし、このあたりは周囲を大木に囲まれた、静かな森林浴の適地だ。多々良か

らここまで車道がある。一般車の入山が許可されているのかどうかわからないが、少なくとも歩きやすい道があることは間違いない。

奥の院から南の五〇二メートルピークに向かつて登る。明るい尾根道に出ると、南西方向に能美島、大黒神島がよく見える。五〇二メートルピークを過ぎて、正面に目指す岩船岳を見ながら一五分下ると、青海苔浦乗り越し分岐点に出る。きょうは、これか

ら岩船岳に行った後、ここまで戻ってきて、多々良の方に降りていく予定だ。

「ひろしま百山」によると、ここから岩船岳を往復すると四時間か四時間半かかる。いま十一時十三分である。また、ここを左に下ると東海岸の青海苔浦に行けるはずだが、これが月曜日に弥山のレストハウスのおばさんにやめた方がいいと言われた道かもしれない。



さらに一五分行くと、また青海苔浦への道が左に分岐している。二五〇〇〇分の一で見ると、さっきの青海苔浦乗り越しからの道とすぐに合流することになってゐる。青海苔浦は、月曜日に降りた大砂利よりも南にある海岸である。上から見下ろすと下の方の海岸は、直線距離はそう遠くは見えないが、かなり急な下りで鬱蒼と木に覆われている。きょうは時間之余裕がないが、いつか行って青海苔浦から南へ

の道路事情も調べたい。地図によると青海苔浦までは北回りの町道が来ている。

青海苔浦分岐から一五分登ったら、少し見晴らしの良いピークに出た。話し声が聞こえるところと思ったら、そこで中高年の夫婦が休憩をしていた。中高年というのは、中年の人と高年の人の総称だと思いが、山で出会うのはほとんど言っていないほど、この言葉で言い表せる年代の人たちだ。といっても、本当の

高年者はそうはいないから、大部分は中くらいの高年者だ。つまり中高年だ。平日に出会うのは、定年を迎えてまだ山に登る気力と体力を残している人たちだ。つまり私くらいから、さて上はいくつくらいまでが多いのだろうか。

いま休憩中の彼らも、もう定年ですからと言っていた。岩船岳に行くのだそうだ。奥さんが話好きな人で、自分が何度もここに来たことや、いろいろな

山に出かけることなどを切れ目なしに喋りかけてきた。急に山に行きたくなっても、そのときちょうど都合のつく人ってそんなにいないから、ひとりでもよく出かけると言っていた。ペースはゆっくりだが、何時間歩いてても平気だと言うので私が、

「健脚なんですね」

と言うと、自分の場合はゆっくり歩くのだから健脚ではないと言って、健脚の定義にこだわっていた。

人の良さそうな旦那さんは、奥さんがとめどなく話している横で、ときどき時計を見ながら、

「足をお止めしてすみません」

と前後二度言った。十二時少し前だが、私はここで弁当にすることにした。彼らは間もなく出かけていった。ここからも能美島の方の展望がいい。私が大学を出て初めて赴任したのは能美島の小学校だが、いま見えている宇根山のちようどこちらからだと反

対側の麓の学校であつた。

きようは水を五〇〇CCのペットボトルに三本持つてきたが、その中の一本がかび臭い。考えてみると、それは納戸の箱の中にあつた空ボトルを使ったもので、今朝水を入れるときによく洗わなかつたのが原因らしい。それは二本目にあけたものだつたが、途中で飲むのを止めて、いざというときの非常用に残して、もう一本を飲むことにする。

二五分くらい弁当休憩をして出発した。しばらく歩いたところで、再び人の話し声が聞こえると思つたら、道の右側にある見晴らしの良さそうな岩の上でさっきの夫婦が弁当を開いていた。またそこで奥さんが話し出して、巖島合戦のことなどをひとしきり聞かせてくれた。山に行った後は、いろいろなことを詳しく書き留めるのだとも言っていた。私もと言いかけたが、長くなりそうなのでおもいとどまつ

た。ここでもおとなしそうな旦那さんは時計を気にしていた。旦那さんは何も言わないわけではなく、ときどきは少しだけ言葉を挟んだ。

尾根歩きは、見晴らしのきくところが多いが、上り下りが激しい。一つのピークから次のピークを見ると、その間の鞍部が凄く低いところまで降りていくように見えて、げっそりすることがある。しかし、実際に歩くとたいはいは大したことはない。一旦麓



から高い稜線まで登っているのだから、稜線上の少々の登り下りは恐れるにたらない。麓のレベルまで降りるような鞍部は、普通はないのである。

ここの稜線歩きは、きつい登りの後にほとんど傾斜のない尾根道が続くといった具合で、道程が長い点は厳しいのだが、その割には歩きやすい。道はわかりやすい。だから適度なハードコースである。

この道で茶色い野ウサギを見た。ウサギとカメの

話では、ウサギは俊敏快速のイメージだが、この野ウサギはそうでもなかった。短い前足に比べて、長すぎる後ろ足が不便そうで、よたよたと走り去った。

岩船岳の山群は、弥山や駒ヶ林の桂林形のピーク群とは全く違って、阿蘇の根子岳形のギザギザピークを成している。そのギザギザが廿日市あたりの高いところから見ると、弥山などの背景のように

顔を出しているのである。私は初め大竹の方の山が、宮島の後ろに見えているのかと思った。何度も眺める中に、それも宮島の山だということがわかってきた。たかだか周囲三〇キロの島内に、全く雰囲気の違う山容の山があることに非常に奇異な感じを受けたものだ。いま、その山を目の前に行っている。

やがてそそり立つ頂上に向かって急登となる。岩の間を縫うようにして登るところや、掴まって登る

ためのロープが張ってあるところもある。胸突き八丁である。そのあたりで、三脚をつけたままのカメラを持ったおじさんが降りてくるのに出会った。やはり中高年だ。

青海苔浦乗り越しから二時間弱で見晴らしのきくピークに着いた。初め頂上かと思つたがそこは岩船岳東峰で、岩船岳頂上はさらに先だと矢印があつた。そこから一三分で頂上に着いた。ここにも展望の良

い岩があり、南の大竹、岩国方面が遠くまで見える。

きようは時間と体力に余裕があつたので、予定外だが、もう一つ南の御床山まで足を伸ばすことにした。足場の悪いところや、岩の間を縫うようなところが多くて結構厳しいルートだつた。御床山の頂上からは、さらに南に下る道が二本あつた。一本は砲台跡へ、もう一本は御床浦へとなつている。砲台跡というのがどこのことかわからないが、御床浦とい

うのは宮島の南端ではないかと思ひ、食指が動いた。しかし時間を計算するとやはり無理をしない方がよさそうだ。だいたいそれらの所までの距離も時間もわからないではないか。本来の南半周計画からすれば、少なくとも南端の地くらは踏みたかつたが、断念した。後で調べたら、御床浦というのは南端ではなく、南端から四、五キロ北西に寄つた海岸だ。

きよう歩く道には倒木が多い。例の夫婦の話では、

大元から青海苔浦乗り越しまでもそうだったらしい。それに大元から駒ヶ林の道にも、月曜日になかった倒木さえあった。この三日間の雨で枯れた木が道に倒れかかったのだらう。しかし、月曜日に役場の職員が、岩船岳への道は誰も行かないから荒れているだらう、と言ったのは違っていた。平日なのに二組の登山者に出会ったし、道は草が刈られていてわかりやすい。大元公園にあった落書き風の

「整備済み、おすすめ」

と言うのは正しかったようだ。ただ役場の彼が言った遠いという点はその通りであつた。

帰りはまず岩船岳まで戻る。この帰り道で一度迷つた。ごろごろした岩の間を通るところで、わからなくなつた。迷つたと気付いたときすぐに、道がはつきりしていたところまで戻つた。するとちやんとテープの目印が先に見えていた。これを見逃して、



何となく道のようになっていると思つた方に迷い込んだのであつた。岩船岳から御床山までの往復は五三分の行程だつた。

岩船岳の展望のきく岩にさっきの夫婦がいるかと思つたが、誰もいない。もう引き上げたのだらう。

岩船岳からの帰り道、幅広い斜面でまた道を見失つた。斜面を下るところで下りられそうなところが広がっていて、そこで迷つた。先ほどの経験を生か

して、すぐに迷い始めたところまで戻った。周りの木や岩に見覚えがあるような気がして、迷ったままかなり進んでいたが、躊躇せずに確実に覚えのあるところまで戻った。するとすぐ横にはつきりした道があるではないか。何気なくこれを見逃したのだ。山で木や岩に見覚えがあるなどと考えない方がいい。往路で身長より高い壁のような岩の横を通った覚えがあったとしても、身長より高い壁のような岩がそ

のあたりに一つしかないという保証は無いのである。現に、迷った道の岩の傍で、来るときにこの岩の横を絶対に通ったと思つて迷つたまま歩き続ける結果となつたのである。

それからこのあたりで、左の太股が引きつりそうになつた。幸いにしばらくペースを落として歩いたら治つていった。

登ってくる人にまた出会つた。きょう岩船岳のコ

ースで三組目だ。体格のいい髭の男だ。はじめ若い人かと思つたが、近くで見るとやはり中高年だつた。しかし。実にかつこうよかつた。清潔感、信頼感、安定感、強さ、優しさ、人懐こさを感じさせる男だ。私もあのような老人でありたいものだと思つた。

岩のごつごつしたあたりで、あの夫婦が登つて来るではないか。しかもずいぶん身軽そうに見える。向こうから声をかけてきた、

「ずいぶん上に長くいたんですね」

と今度は旦那の方だ。

「もう一つ先の、御床山まで行つたので」

と言うと、奥さんが、

「健脚ですね」

と言つた。彼女の定義によると私は健脚らしい。

旦那が、

「荷物を下に置いてきました」

と言った。身軽そうに見えたはずだ。健闘を祈りあ  
つて分かれた。五日市の人だと言っていたので、ス  
ーパーでも出会うかもしれない。少し行つた岩の  
前に、何の用心もなくリュックサックが二つ置いて  
あつた。

弁当を食べた場所まで戻る前に、大川浦への道が  
左に分かれている。二五〇〇〇分の一にもちやんと  
ある。青海苔浦分岐の一〇〇メートルくらい南であ

る。往きには気が付かなかつた。さらに進むと、あの夫婦が弁当を食べていた岩がある。登つてみると、目の前が大野で、なかなかの見晴らしである。私は能美島に三年いたあと大野町の小学校に四年間勤めた。思い出のある場所がいろいろ見える。そこで四年で教員生活から足を洗つた。今度来たらここで弁当を食べよう。

青海苔浦分岐では、青海苔浦まで行つてみようか

と少しだけ迷ったが、三時半を回っていたので諦めた。青海苔浦乗り越しには十五時四十七分に着いた。ここを通過して岩船岳に向かつてから四時間半、「ひろしま百山」の記述通りである。もつとも私は御床山まで足を伸ばしたので、やや私の足が速めである。ここから左に折れて多々良に向かう。急な下りである。途中ロープに掴まって降りるところもあつた。急下り一三分で林道に出た。多々良から奥の院に通



じる林道である。登山道は、この林道を横切つて再び山道に入り、向かいにある四二三メートルの前峠山の尾根を越えて大元公園に降りるようになってい  
るのだが、私は多々良が確かめたかつたので、ずつと林道を下ることにした。真正面に経小屋山を見ながらの下山である。経小屋山は大野町の山で、高さは五九六・六メートル。この宮島の弥山より高い。海岸近くにすらつとした台形に聳えているので遠く

からよく見える。広島市内から鉄道や車で沿岸を南西に向かうと、前方に誰の目にもとまる山である。林道を二三分下ったところで、多々良の海岸線の町道に出会った。やはり林道は車通行禁止としてあつて、奥の院に一般人が車で行くことはできないようだ。

多々良が近付くと何軒か農場があり、観光農園もある。多々良で出会った町道は、さらに南にも延び

ている。どこまで続いているのか、その先がどうなっているのか確かめたいところだ。

多々良から大元への車道は、対岸の大野を間近に見ながら歩く。眼下の砂浜もきれいだ。トンネルを二つ通って多々良から三八分で大元公園に着いた。そこで顔を洗い、ジュースを買って、それを飲みながらぶらぶらと棧橋に向かった。

大鳥居と棧橋の間の浜辺で、修学旅行生たちが潮

干狩りをやっていた。これもプログラムに組まれていたらしく、みんなゴム草履のようなものを用意していた。収穫物はどうするのだろうか。

今朝二〇分で歩いた栈橋大元公園間が、いまは三〇分かかった。九時間ぶりに栈橋に戻ってきた。長い行程であった。朝は、月曜日より体調が良いと言ったが、結局きょうも疲れた。でも来てよかった。宮島で知らなかったことをいくつも体験した。駒ヶ

林、奥の院、岩船岳とそれに至る縦走路である。御床山よりさらに南への道、青海苔浦その他浦々への下山道、多々良より南に伸びる町道の存在など、南半周への調査としての収穫もあつた。

宮島口の駐車場で車をとって家に着いたのは十八時四十五分であつた。

\*追記（二〇〇一年十二月十六日）

今日は岡岷山の絵を見るために千畳閣と歴史民俗資料館に行き、そのついでに多々良浦以南の道を少し調べた。歩いたのは、大元公園から片道一時間ほどのところまでであったが、その先にも道は続いており、途中大川浦への道標があるなど南半周の可能性をうかがわせる成果があった。

多々良を過ぎるとすぐに、広島大学理学部植物研究所のための道路であるから、事故等の責任は一切とらないとの表示があるが、舗装された道路が車一台分の道幅で続いていた。二キロくらい行つたところでに広大の研究施設の建物が何棟かあるところに出る。そこの郵便受けの住所を見ると、宮島町三つ丸子山一一五六となつていた。二五〇〇〇分の一にその地名はないが、宮島町役場で買った五〇〇〇〇分の

の一に『広島大学附属宮島自然植物実験所』（以下実験所）とある。地図上では三・〇〇五・五メートル道路の終わる地点で、それは二五〇〇〇分の一でも位置が読みとれる。そこから先は一・五メートル未満の道路となる。宮島の南端に向う道で、大きな高低差はないがアップダウンの続く山道である。その初めころに大川浦、須屋浦方面という標識もあつた。

宮島町の地図では大川浦あたりから大川山という



のに入っていく道しかなく、須屋浦までは続いていないようになっていゝるが、二五〇〇〇分の一では須屋浦手前まで続いた道があつて、そこから一旦山に入つて、というより半島のような南に突き出した部分の根元を越えて島の最南端（宮島町の地図では江の尾浦）に出る。そこから御床山に登る道が続くのである。

このコースの道を実際に通ることが出来れば、南

半周がやや不完全ながら一応できることになる。

地図で距離を測ってみた。棧橋から実験所までの舗装道路が五・五キロ、実験所から島の最南端部までが四・四キロ、最南端部から岩船嶽までが二・〇キロである。さらに、岩船嶽から多々良までが七・二キロ、多々良から棧橋が舗装道路で三・五キロ。合計で二二・六キロとなる。

それを歩いたときの所要時間を予測すると、舗装

道路合計九キロを二時間、山道の合計一三・六キロを時速一キロで行くと約一四時間となり、全部で一六時間になつてしまふ。これでは、一日では、特に日の短い冬場は無理である。山道を時速二キロで行くことができたなら約七時間、それに舗装道路の二時間を加えて九時間となり、朝八時に歩き始めると午後五時に栈橋につくことになる。これも厳しいが何とかぎりぎり可能である。

山道はどこまで行けるかわからないから、五時までに必ず舗装道路に戻ってこられるように時間を計算しながら歩くべきだろう。もちろん戻る道を迷うことも読み込んでおくべきである。それは、コースを進む場合も同じである。五月のとき御床山から岩船嶽への道で二回迷っているし、今日も研究所に戻るところで迷いかけた。山で行き暮れたら遭難ものである。

## 第七日「縦走」

向山（むかいやま、六六五・九メートル）

窓ヶ山（まどがやま、七一一・四メートル）

五月二十九日（火）（平面距離約二四キロ。山道を含む。約八時間三〇分）

五月五日に始まり、あいだに一週間の中休みを挟んで六月二日までの《初夏のひとり歩き二〇〇一》

は残り一週間となった。先週は雨で三日流れて、結局月曜と金曜の二回しか実行できなかつた。今週も週間予報によると、水曜、木曜と二日は雨が降るらしい。晴れるのは、予報通りとなつたきょうともう一日は金曜日である。この二日は窓ヶ山と東郷山の登山にする。まずきょうは窓ヶ山である。

「ひろしま百山」に載っているコースを参考に、藤

の木団地から窓ヶ山の東にある向山に登り、そこから西に主稜線を縦走して窓ヶ山の二つのピークを経て白川に下山する。窓ヶ山および向山の連なりは、わが家からは南東の方角にあつて、稜線は東西に伸びている。地図上の直線距離は、家から窓ヶ山頂上が四キロ、向山が六キロだ。窓ヶ山南麓の道路を歩いて、最も東よりの向山の南側から登り始めるというコースである。ただし、「ひろしま百山」にはこの

逆コースが紹介してある。私が逆にしたのは、登山で疲れて下りてきてからの歩きが短い方がいいと考えたからである。もちろん登るまでのアプローチが長いのも決して楽というわけではない。きょうも登山口らしいところに到達したのは、家を出て二時間三三分歩いてからであった。これは下川上から大峯山に登ったときのアプローチ時間三時間に次ぐ長さだ。



途中魚切ダムの堰堤に寄った。湯来の方から二つ目のトンネルのところまで、トンネルをくぐらずに、県道から右にそれて迂回するとダムの事務所前に出る。そこは広場になっていて、公衆便所もあつたので利用させてもらった。便所そのものは意外に汚れていなかつたが、例によつて卑わいな落書きがいっぱいだった。それらを読みながら用を足した。

四つ目のトンネルの入り口に、窓ヶ山魚切コース

の登山口がある。見上げると狭い谷の奥に山頂が目の前にあるように見えている。ただ、この登山道は工事の為通行止めとしてある。歩いているのは、白川までは国道四三三号線、白川からは県道四一号線である。国道は白川から右折して極楽寺山の北側を通って廿日市に向かう。五日市方面には県道四一号線に引き継がれるのである。この県道は、左側が山の急斜面や崖、右側に魚切ダムを見ながら下る。わ

が家では、毎週一、二回この道を通つて五日市のスーパーまで買出しに出かける。また毎日曜日、広島でのオーケストラの練習にもこの道で行く。車で走ると周囲の緑のきれいさはわかるが、何本も渡る沢の素晴らしい眺めは、歩いたときにだけゆっくり味わえる。それらの何か所かからは、狭い谷筋の上の方に窓ヶ山が見える。

向山には藤の木団地から頂上西側の鞍部にある仏峠（ほとけだお）に登り、そこから窓ヶ山とは反対方向だが向山頂上まで行く。頂上で折り返して窓ヶ山に向かう。藤の木団地の入り口から、きょうこれから歩く稜線が一望できる。それはかなり長い。

団地の中には分かれ道があつて、最初から道の選択に迷つた。最初の二股に分かれた道は左を選んだ。昔からある道のような感じがしたからである。右は、

団地の中央通りに繋がる道だ。その後も何本か、目の前に見えている目標の山の方に入っていくような道がある。登山口の案内は全くない。だが、うかつには曲がらずに、とりあえず舗装道路を進んでいった。道が大きく右に曲がって、何となく向山から離れていくような風になったので、道路沿いの会社の事務所で道を訊いた。事務服を着た女の人が出てきて教えてくれた。ちようどそこから山の方に向かう

道を入っていくのだということだった。教えられたとおりに進んだが、念のため畑仕事のおばあさんにも訊いた。間違いないようだ。山の方に入っていくと新しい堰堤ができているから、そこから登るのだと説明してくれた。「ひろしま百山」にも、

「小さな堰堤をおりてしばらくすると、野登呂地区の最も奥の民家がある」と書いてある。

車が通れるくらいの道を行くと、間もなく堰堤の下に出た。「ひろしま百山」には、「小さな堰堤」と書いてあるが、これは小さいとは言い難いと思った。真新しい立派な堰堤である。その堰堤の右端には階段が付いている。しかし沢を渡ってその階段の所に行く道がない。沢といっても幅は狭く水量もないので、渡ることは簡単だが、正規の道としては様子がおかしい。一方左端の斜面が、堰堤の上に出るため

にたくさんの人がよじ登ったように、土が掘れて段々のようになっている。堰堤の前の広くなつたところには車が三台停めてある。登山者の車かもしれない。

私もこの足跡の方を行くことにした。堰堤の上からは、山道が始まっていた。前方の木の間にちらりと人の動く姿が見えた。きょうは仲間がいる。間もなく追いついた。その人も、向山へはこの道で正解



だと言った。その人は登山靴を履いていたが、あまり上まで行くつもりがないようだ。団地内に案内板がないのでわかりにくかったと言ったら、案内板を立てときましようと言う。訊くと藤の木団地の住人だそうだ。

そこまではよかったのだが、時々あるビニールテープを頼りに急斜面を登り始めてすぐに、テープは

なくなつた。どうも堰堤の工事で付近の木はかなり伐採されており、登山道は消えてしまつてゐる。早くもめくらめつぼう急斜面をはい上がることになつた。どこに向かつてゐるのかもはっきりしない中、とにかく上へ上へと登ること一時間、おしまいころまたテープが現れて、やっと尾根に出ることができた。そこは主稜線の鞍部の一つだったが、仏峠とも何とも書いてない。縦走の最初の山である向山まで

どれだけ時間がかかるかわからないのに、すでに十二時十分過ぎだ。

とにかく東に向山があることは確かだったので、稜線を東に向かった。一七分かけて大きなピークをひとつ越えた鞍部に、仏峠という小さな標識のある四差路があった。斜面で道を失って、ピークひとつ分東に出てしまったようだ。標識によると、左に下りると上奥畑、右に下りると野登呂となっている。

きようのルートが正式に始まるという、ほつとした気持ちになった。この野登呂方面という道を行くと、ちやんと下山道が最後まで続いているのだろうか。

実際に行つて確かめたい気分だが、いまはその余裕はない。「ひろしま百山」には、

「尾根道から次第に右手の斜面をジグザグに下る……左右に沢の音が聞こえる尾根上に出る……小さな堰堤を降り……（堰堤からは）杉に囲まれた

緑の大路……」

とある。この表現は、さつき難儀して登ってきたルートと似たところが多い。ただ、「小さな堰堤」と言うのが、あの新しい堰堤と同じものことなのか、少し疑問がある。

とにかく向山に行こう。仏峠から二〇分登ったら展望の良い、岩がごろごろしたところに出た。向山の「山頂直下の展望地」と「ひろしま百山」にある

のがここのことらしい。ここで弁当にした。眼下に藤の木団地、五日市、美鈴が丘団地、運転免許センターなどが完璧に鳥瞰できる。美鈴が丘団地はこうして高いところから見下ろすと、南に鈴が峰、東に鬼ヶ城山をはじめ四周が高くなつていて、まるで外輪山に囲まれた火口盆地の中に、びっしりと家が密集しているような格好である。また反対側には、これから行く窓ヶ山の鬱蒼とした緑と、花崗岩色の岩

が日の光に映えている。

弁当の時にブヨや蜂などが顔の周りでうるさいので、初めて虫除けスプレーなるものを使った。先日スーパーでたまたま目に留まったので買っておいちなものだ。効果てきめんで、落ち着いて弁当を食べることができた。

そこから頂上までは五分。頂上からは吉山、つまり北の方角が木の間からかいま見えるだけで、展望

はほとんどない。頂上とはいっても狭く、普通の山道の何でもない一つのピークのような感じである。東郷山を高いところから確認するのが楽しみだったがだめだった。

頂上からさらに東に進む道があつたが、折り返して今度は西に向かつて主稜線を歩くことにする。一旦尾根筋に出てからは、道は常にはつきり歩いて歩きやすい。だが、主稜線の縦走というのは、各ピ



ークを正直に登ったり降りたりするものだ。後で下界から山を見上げたとき、歩いたコースをそのまま振り返ることができぬ。仏峠、悪戦苦闘してたどり着いた鞍部の分岐点を通り越して、大小のピークをなぞるように登り降りした。

稜線を歩いているときに、窓ヶ山の方から来る二人連れのおばさんに出会った。これから窓ヶ山を通って白川に降りると言ったら、

「もう二時ですよ。大丈夫ですか」

と言われた。よつぽど先が長いのだろうか。また、なだらかな道を歩いているときに、右側の斜面を体重のありそうな動物があわてて逃げ去る足音がした。音のする方を注意深く見たが、姿は見えなかつた。

右の方からの登山道が合流してくる場所が二回あった。二つ目の合流点に中国自然歩道の案内板があり、道幅が広くなる。ここから山道の整備状態が一

段とよくなり、案内標識も節目ごとに立っている。これが中国自然歩道の管理状態なのだろう。この時点で、向山頂上から約一時間である。

窓ヶ山を五日市側から見ると、ドーム型のピークが二つ並んでいるのが見えるが、その東側のピークに立つと南側の展望が素晴らしい。またすぐ目の前に西峰のピークの岸壁が迫力を持って迫ってくる。また鬱蒼とした木々も素晴らしい。緑は、もう新緑

とは言えないかもしれないがみずみずしく光っている。東峰頂上の広い岩に座って水を飲んでいると、下の方から鷹のような大型の鳥が滑空しながら舞い上がってきた。あれはハチクマかもしれない。

なお東峰に達する少し前に、魚切に降りる道の分岐点があつたが、そこに魚切コースは崩落のため通行不可とあつた。麓の県道にあつた登山口の通行止めを表示と一致する。

東峰から西峰までは一五分。その鞍部には大きな岩に囲まれたひんやりするようなところがあり、岩が特徴的なこの山の見物の一つだ。

西峰が窓ヶ山の頂上ということになっている。中学生の時、通学の汽車の窓からこの山をよく眺めた覚えがある。頂上付近の岩の露出が印象的だったのだ。もちろんその当時、自分が六〇になったとき何処でどのような生活をしているものか考えたことも

なかつた。それから半世紀近く経つたいま、かつて遠くから眺めた山の頂上に初めて立つた。ここの展望もよく、阿弥陀山から大峯山にかけての尾根の連なりが一望できる。

白川への下りは、いくつもピークを越えながらのかなり長いものだった。途中家の裏山の伐採場がすぐ向かい側に見えるところがあつた。直線距離では、

もうずいぶん家に近いところにいるのだ。

頂上から一時間で林道の工事中的場所に出た。このあたりの標高が二五〇メートルと書いてある。七一メートルの窓ヶ山から四六一メートル下りてきたことになる。ここからはもう顔で蜘蛛の巣を切りながら歩くこともない。

白川バス停までの林道歩きは一二分、白川から家までは国道四三三三号線を五〇分であつた。

窓ヶ山の山地と東郷山の位置関係を高いところから確かめたかったが、それは果たせなかつた。

きようは最後まで天候に恵まれた。朝の中は多少うつすらとした雲があつたが、頂上に着いたころは快晴になつた。

合計八時間半の行程は、道無き道がいきなりあつたりして、かなり疲れた。



## 第八日「一周」

阿弥陀山（あみだやま）

五月三十一日（木）（平面距離約三三キロ。七時間五〇分）

きょうは天気予報で雨となっていたので、休養日と決めていた。しかし、目を覚ますと枕元の障子に日が射している。急遽ウォーキングをすることにし

た。明日は晴れることになっているので、予定通り東郷山登山でシリーズを締めくくる。

きょう登山ではなくウォーキングにしたのは、日が射しているとはいふものの、もともと快復途中の天気だから山はさけた方がいいと考えたからだ。実際に昼過ぎまで薄日が照ったり、霧雨が降ったりの日だったから、この判断は正しかった。

コースは、一度やりたかった阿弥陀山一

周である。第一日のところで、東郷山を中心とした山地を囲む道路を紹介したが、同じように今度はわが家の西側にある阿弥陀山を中心とした山地を囲む道路がある。南東側は県道二九二号線あるいはもう少し北側にあつて山寄りの県道四六一号線、それに第四日に歩いたさらに山寄りの町道もある。きようはまだ歩いたことがない県道四六一号線にするつもりだ。南西側は県道四二号線、北西側は国道四八八

号線そして北東側が国道四三三号線である。国道四三三号線というのは、東郷山を囲む南東側の四三三号線とおなじもので、湯来町役場前からわが家までこの国道を歩く。南西側を区切る県道四二号線は、大峯山の東麓の道路で、笹が峠で大峯山のすそ野を越える。標高七八七メートルもある峠で、この南西側だけが明確に山地を区切るような谷筋ではない。計画段階でざっと測ったところきよりのコースは三

一キロくらいであつたが、帰つてから詳しく測りなおしたら三三キロあつた。道の無い急傾斜の藪こぎや、延々と続く急登に比べると、車道歩きはずいぶん楽だ。きようは涼しかったといふこともあるが、汗拭きのタオルをほとんど使うことがなかつた。もつともそれには、早めの吸水、休憩、カロリー補給が功を奏したことも注目すべきである。

このコースにはおにぎりを買うようなコンビニは

無いかもしれないと思つたが、やはり予想通り無かつた。シリーズの初めに非常食として買つて置いたバランス栄養食品が役立つた。

三三キロという距離は、昨年の徒歩旅行の経験からしても私にとつては、一日の量として多い方だが、足などに異常は全く起こらなかつた。湯来町役場から大森に向かつて国道四三三号線を登り始めたところには、足腰にかなり疲労感があつたが、山小屋風食

堂でホットケーキとミルクティを摂って一五分の休憩をしたら、すっかり元気が快復して、そこから家までの約一時間は快調であつた。家についてからひと休みもなく、いつもの洗濯だけでなく、一気に夕食の調理もした。きょう出かけるつもりがなかつたので、きのうのうちに作り置きをしなかつたのである。

きょうもいくつもの印象的な風景に出会った。まず体育館のあたりから、窓ヶ山がよく見えることを再発見した。これまでも、体育館に行くときにいつも見ていたはずだが、あの山を縦走した後なので、初めて見たように印象的だ。向山と窓ヶ山の全部は一度に見えないが、縦走した距離の長さが実感できる眺めだ。実はもう一箇所、両方の山が一望できるところがあつた。中重光から県道四六一号線に入っ



てしばらく行つたところである。体育館からよりも斜めに見る感じだが、縦走した主稜線をはつきりと見ることができる。ここから見ると、向山頂上から窓ヶ山頂上までかなり長い道のりに見える。それを約一時間半の尾根歩きで到達したのだから、とぼとぼした人間の歩みもばかにならない。野登呂からの藪漕ぎや、白川までの下山を含めると約五時間あの山中を歩いていたのだ。

県道四六一号線はしばらく川に沿っていて、周りには大木があつてなかなかいい道だ。中国電力の新しい西広島変電所というのがあたりが峠になつていて、そこから佐伯町に入る。この変電所には、阿弥陀山から大峯山の方に伸びる稜線の上を越える三本の送電線が集まつてきている。平成十二年四月一日発行の二五〇〇〇分の一「廿日市」には三本とも載っている。平成七年五月撮影の航空写真に基づき、

同九年八月現地測量、同十一年部分修正という版だ。ところが平成二年十一月の航空写真、同四年六月の現地調査に基づく同五年四月一日発行の「川角」には、三本の送電線の中最も阿弥陀山よりの一本がまだ載っていない。もしこれが載っていたら、第三日の大峯山阿弥陀山縦走のときに、阿弥陀山が近付いてからの自分の位置がもう少し正確に判断できたと思う。

窓ヶ山のある東の空は雲が高かったが、反対側の大峯山、阿弥陀山、東郷山には雲がかかっている。

上大町で中国自然歩道極楽寺羅漢山ルートが左から合流してくる。県道四六一号線と県道四二号線との分岐点には、もう来たのかという感じで着いた。とはいっても家を出て九キロ強、一時間五三分経っている。ここから県道四二号線に入って、笹が峠を目指す。大きな道路標識があつて、吉和二五キロ、

本多田一三キロとある。県道の分岐点付近は上大町だが、県道四二号線に入って三〇分くらい歩いた西の明というところで、中国自然歩道は大峯山の南麓の方に分かれていく。西の明から内野分かれまでは五分。そこはもう平谷である。

平谷からの大峯山の眺めは素晴らしい。そのことは先日の阿弥陀山からの縦走の時に知ったのだが、きょうあらためて素晴らしさを確認した。大峯山は

このとき完全に頂上を見せていた。大峯山の姿は、内野分かれのあたりからと山の中の登り坂にさしかかってから、そして峠が近付いて林の切れ目から見るのではそれぞれ姿を変えていく。内野分かれから平谷の集落あたりまでは、あの獅子頭のような岩の頂上が頭上にのしかかるような迫力がある。それが坂を登るに従って、獅子頭は横を向き、やがて背を向けてしまう。そこではすそ野を引いた明るい緑

の斜面が目の前に伸びてきて、一気に駆け上がれそうな感じである。

笹が峠までは、平谷の集落から約五〇分、四キロ弱であるが、笹の下草に覆われた薄暗い植林の中の道で、少し熊を心配しながら歩いた。熊に逃げてもらおうと、ついコメント録音の声が大きくなった。このシリーズでは、ICレコーダーを携帯して各ポイントの通過時間や、途中見たもの、感じたことな

どをコメントしているのである。薄暗い植林帯に囲まれた道を歩いていて、急に雑木林に出ると、もう新緑の時期は過ぎかかっているが、やはりまだ一段と緑が明るい。坂を登り始めたころ後ろを振り向くと、約二か月前に登った大野権現山が見えていた。

笹が峠は、先日大峯山阿弥陀山縦走の時に、大峯山から下山してきてここで弁当を食べたところだ。大峯山頂上の岩にやっこの思いでよじ登り、怖々下



りたことで、いつも家から憧れて見ていた山に拒否されたような、裏切られたような気持ちで弁当を食べたのを思い出す。

きょうもここでバランス栄養食品を弁当代わりに食べる。道路脇に乗用車が停めてある。登山者のものかもしれない。一〇分にも満たない弁当休憩で出発する。

ここからの下りは車が通る県道としては相当な急

坂だ。こちら側には大峯山からの沢がたくさんある。どの沢も岩がごろごろしている。沢の傾斜もきつく、水音は滝のように激しいものが多い。下り始めて右後ろを見上げると、先日歩いた阿弥陀山の方に向かう林道が高いところを通っている。あの時下の方に見えていた集落をこれから通ることになるのだと思う。

急な下りのために、つま先が靴の先に当たって爪

を傷めそうだ。かかといっぱいに足を寄せるようにして、紐を縛りなおした。これでだいぶ調子は良くなった。

約三〇分で小多田の集落に出た。なお、笹が峠で再び湯来町に入ったのだが、その時点からすでに地域としては小多田となっていた。集落の中の掲示板に、

「小多田ウオーク、六月三日（日）五・七キロ。午

前中に終わります。ふるって参加してください」という張り紙があつた。

中小多田というあたりだったろうか、大きなログハウスが山の中に建っていて、予約制の山小屋と案内があつた。そう言えば、わが家から五日市に出る七曲がりの辺にこの山小屋の広告看板があつたような気がする。

平谷からここまでの六・四キロ区間は、積雪時通

行不可となっている。期間は十二月十五日から三月十五日まで。笹が峠からこっちの急坂ではさもありなんと思う。笹が峠まで一台の車とも出会わなかったが、小多田付近では数台に出会った。

腕まくりでむき出しになった腕に風が当たると寒いくらいである。このあたりではシャツの袖を伸ばして歩いた。

下ってくるるとき何度も大峯山を振り返って見た。

こちら側からは緩やかに丸い山頂で、これと云って特徴のない姿である。砂谷方面からの端正なピラミット形、檜原方面からの少し西に傾いた台形、そして平谷からなどの姿はいずれも名峰の名に値するが、こちら側つまり北側からの姿に特徴はなく、すぐに他の山に紛れてしまふ。

志井から湯来温泉に向かう国道四八八号線でも、地図で方角を確かめながら何度も大峯山を見つけよ

うとしたが、頂上が緩やかに丸い山は他にもあつて、確認するに至らなかつた。一度地元の人に、あすこに見えている丸い山は大峯山だろうかと尋ねてみたが、そうかもしれないねという程度の返事であつた。たよりのない返事ではあつたが、この辺からはそんな山は見えないと言わなかつたところをみると、見えている可能性もあるのかもしい。大峯山が、東西南北どの方角の周辺道路からも見えるとしたらや

はり、敬意を表したくなるではないか。きょうは、阿弥陀山一周なのだから阿弥陀山についても一言触れておこう。阿弥陀山は東と南の道路からは見えるポイントがあるが、西と北からは見えない。これは初めからわかつているのでがっかりもしない。広島市内からの帰りに、美鈴が丘のあたりから見えたりすると、むしろ感心したりする。念のため付け加えるが、遠くの山が高いところから見えるのは当たり前



前で、広島県西北部の高山の頂きに立てば、大峯山だけでなく阿弥陀山も、その山容さえ知っていれば確認できるのではなからうか。

さて、志井で国道四八八号線に出たのが十二時四十二分。それから帰着するまでにさらに三時間半の行程であった。四八八号線は水内川の流れとともに歩く道だ。途中道路沿いに魚切の滝というのがある

ことからわかるように、水内川はこのあたりではまだ岩の間を流れる溪流だ。それが湯来温泉に近づくに従って、ゆつたりとした川になつていく。

湯来温泉の一キロくらい手前に湯来冠山（ゆきかんむりやま）登山口があつた。入り口は舗装道路になつているが、いかにも深々とした谷に入つていくような雰囲気であつた。湯来温泉を過ぎたあたりの川縁に座つてカロリー補給をしながら、湯来冠山と

思われる山を眺めた。鬱蒼と木に覆われたどっしりした姿は、一〇〇四メートルという標高の割に大きく見える。何よりも奥深い山という感じである。この山も「ひろしま百山」に入っている。帰ってから地図で見ると、湯来冠山と滝谷山を囲む筒賀村、吉和村との境界沿いの道路を一周することもできるし、湯来冠山を越えてその道路の反対側のあたりに出ることまでできる。一周道路は家から全部歩くと四〇キ

ロくらいだろう。一度挑戦してみたいコースだ。

湯来町役場まであと二〇分というあたりには石が谷溪谷の入り口がある。溪谷歩きのコースは往復で九キロ、普通に歩いて二時間半と案内板に書いてあった。これはいつも見て凄いと思っていた、役場の後ろに聳える岩だらけの山の麓付近にある溪谷だ。こちらは湯来冠山よりは近く、家から三〇キロ以内のウォーキングで行ける。一度妻と来ることにしたい。

湯来町役場から国道四三三号線の登りにかかったあたりでは、朝から七時間以上歩いており、さすがに足腰に疲れを感じた。役場前から二〇分の所にある、山小屋風の店で休憩したのが、非常にタイミン  
グ良かったということはずでに書いた。

家に着くと、さんさんと降り注ぐ午後  
の光の中に、きょうも大峯山が静かにある。あの麓を歩いて来た

のだ。

第九日（最終回）「縦走」

東郷山（とうごうやま、九七七・四メートル）

六月一日（金）（平面距離約一九キロ、ハードな山道を含む。七時間三〇分）

百パーセント晴れの予報だったが、薄雲が広がっ

ている。しかも戸山車庫あたりを歩いているときには、東郷山の方角から雷の発生を予想させるようないやな感じの雲の塊まりがちぎれて流れ出していた。しかし、大変な難儀をして鉄塔のあるピークに達したころには、すっかり明るい空になって、天気心配はなくなった。

きょうはそれより別の心配があつた。熊だ。先日妻と、東郷山一周のウォーキングをしたとき、やは

り戸山車庫あたりで地元のおじさんから、熊がよく出て飼っているミツバチの箱を襲われるという話を聞いたことがあるからである。このあたりで熊が出てくるとしたら、東郷山側の山中からだろう。

上垣内（かみごうち）の集落を過ぎて山道に入り、それが細くなり、すぐに笹が覆い被さった山道になるとますます熊の心配が強まった。やがて道はなくなり、藪を漕いで延々と登るときには、いつ昼寝を



している熊と鉢合わせになるかと思ひながらの登りであつた。しかし、だんだん道に迷つた不安の方が強くなつて、休みもせず、急ぎ気味で苦しいのを我慢して急登するうちに、熊への不安はいつの間にか忘れていた。主稜線に出てからは、鉄塔列にそつてはつきりした道があり、こんどは逆に安心感で熊への不安は完全に忘れてしまつた。

ところが、東郷山の山頂から伏郷への下山道を、

目標を達成した満足感に浸りながら、ゆったりした気分歩いていけると、左側の笹の中で急に、そうとう体重のありそうな獣が突然走り去る足音が起こった。姿は全く見えなかったが、あれはきつと熊かイノシシである。ダダツダダツという足音は、宮島で聞いた鹿が走る足音と似ていたので、蹄のあるイノシシだったのかもしれない。

家から湯来町企業団地経由で国道四三三号線に出て、川角交差点の先のコンビニでおにぎりと非常用にバランス栄養食品を一箱買った。おにぎりは、いつものビニールで海苔を隔離したやつではなく、トレーにさけ、昆布、梅の三種類とたくあんがパックされたものにした。先日、窓ヶ山のとときやはりこの店で、これしかなくて買ったのが、案外美味しかったからである。とくに山ではたくあんが美味しい。

七曲がりには狭くて歩道のない道だが、だいぶ慣れた。上り下り合わせると、ここを歩くのは一〇回目くらいになる。川角から七曲がりを抜けるまでに二〇分くらいだから、七曲がりだけは一五分くらいだろう。はじめはこの一五分が長く感じられたが、最近はアツという間だ。

沼田分かれからの県道七七号線は、峠まで登りの連続ではたちまち汗が流れ始めた。こここの峠への途

中に一箇所だけ振り返ると大峯山が見える箇所がある。それは沼田分かれから一八分、峠にある茶屋まであと一〇分というあたりで、二階建ての一軒家を過ぎたところだ。大峯山はやや霞んだ姿を見せていた。道端のアザミが美しい。

広電バスの戸山車庫前は、「ひろしま百山」に東郷山登山コースの起点の一つになっている。よく見ると、車庫の向かい側少し戻ったところにお寺があり、

その前を舗装道路が山の方に向かっていて、それが登山道へ繋がっているのだらう。きようは伏郷に下りる予定なので、ここから登ったのでは距離が短くて物足りない。さらに北東の大峠に登って、南西に縦走してきて東郷山頂上に至り、そのまま南西の伏郷に降りるコースを採る。

大峠コースへの導入路は、この道を通るたびに感心していた立派なお寺の前の道を登って行く。お寺

の裏手の森を迂回すると、集落が開ける。そこが上垣内で、その谷を詰めたところから登山道が始まる。上垣内から右の方を見下ろすと、県道まで開けていて戸山の方が見渡せる。これまでここの県道を四度歩いているが、いつもお寺とその麓の県道沿いにあるこれまた立派な築地のある屋敷に気を取られていて、山の裾野にせり上がっていく広々とした集落と、お寺の前の道との地形的な繋がりを意識したことは

なかつた。

集落の中の道を、二五〇〇〇分の一を手に進んだが、細かいカーブまで正確に地図通りである。集落が終わったところから広い登山道が始まった。家を出てから二時間強のアプローチである。やがて道は笹に覆われた細い山道になる。沢を左手にして道は登っていたが、突然壁のような急斜面にぶつかって道が無くなった。そこまでは二五〇〇〇分の一にあ





目印になる。送電線は、北東から南西に東郷山の東肩のあたりを通って伸び、国道四三三号線を越えて阿弥陀山に這い上がっている。従ってその方向の稜線上のピークを拾うように鉄塔が建っているのである。

さていまの問題は左右どちらの尾根にとりつくかである。これを間違えると道のりがずいぶん違ってくる。つい先日の向山窓ヶ山縦走の時に、藤の木団

地から登り始めて間もなく、きょうと同じように道が無くなり藪を漕いだが、大きなピーク一つ分予定より西に出てしまった。

いま決め手になるようなものは何もない。なんとなく明るい感じがするという理由で右側の尾根に行くことにした。ところどころ藪に、すり抜けられる程度の隙間ができているのは獣道だろうか。そんなところを、木に掴まってやっとなんとか体を引き上げながら

急登すること五〇分、やっと鉄塔のある、尖ったピークに出た。実はまだ下の方にいるとき、一箇所だけ見上げると尖ったピークに鉄塔があるのが見えた。その時はまだ標高差一〇〇メートルくらいはあったと思う。その位置が大峠とどのような関係にあるのかはわからないが、とにかく下から見えていた鉄塔の所にたどり着いたのだ。座り込んで水を飲んだ。

あまり展望はなかったが、登ってきたのとは反対

側の下の方に二本の山間の道路が見える。稜線に來たのだ。見えている道路は白砂林道と不明峠を通る県道であろう。

思えば、途中では緊張していたのかほとんど水も飲まず、休憩もとらなかつた。ここからは尾根伝いに道がある。大峠がそこよりも東側の鞍部なのか、西側にあるのかはわからないが、とにかく西に進む。鉄塔列はほぼ主稜線に沿って並んでおり、尾根道も

鉄塔をたどるようについている。したがってピークやこぶに達するたびに鉄塔の下を通ることになった。道があることの有り難さをしみじみ感じながら歩いた。道さえあれば、少々の登りはなんでもない。

尖ったピークから西に尾根を下ること八分、四差路に出た。中電の標柱があるだけで、登山者向けの標識はなにもない。しかしここが大峠なのかもしれない。すぐまた次のピークに向けて登る。五分でピ

ークについたが、相当な急登だった。途中鉄の階段が掛けてあった。階段はいくつかに分かれていたが、合計九〇段あった。

鉄塔の下の開けたところで弁当を食べた。先が長そうなので三つのおにぎりのうち一つを残した。この場所は南東の展望が開けていて、窓ヶ山と向山それに戸山車庫あたりの県道がよく見える。さつき県道を歩いているときに、右手の山を向山ではないか

と思つていたが、違つていた。向山と窓ヶ山は、県道から見た山からさらに谷一つ隔てた南側に位置している。したがつてさつき歩いた県道からは向山は見えないのである。

見える景色と地図を照らし合わせると、さつきたどり着いた、尖つたピークは七九二メートルピーク、いま弁当を食べているのが次の八八二メートルピークとの間にあるピークだと思われる。だとするとさ



つきの四差路の鞍部はやはり大峠だった可能性がある。迷ったときに左側の尾根にとりつけばよかつたのだろうか。これを確かめるには逆行してみるしかない。

弁当をすませ、尾根筋に沿って標高を高めながら歩くこと二五分、きょう初めて登山者向けの標識に出会った。二叉路で、直進が東郷山、左が戸山車庫、いま来た方が大峠となっている。確かに私は大峠の

方から来たのだ。その大峠がさっきの四差路なのかは不明だが、はつきりした標識に出会ったことで、体中に何ともいえない安堵感がジワツと染み渡ってきた。

さらに尾根筋のよく踏みならされた山道を一〇分歩いたら三差路に出た。明確な標識がある。直進が東郷山、右が和田（湯ノ山）と四本杉である。「ひろしま百山」によると東郷山の頂上から四本杉まで四

○分となつてゐる。頂上からここまでの時間がわからないから、ここから四本杉までも四〇分以内であることしかわからない。さらに「ひろしま百山」にはこのコースについて、「急な下り」とか、「道が細くなる」「テープの目印」「迷いやすい」「やつとくぐれる倒木」「ツガの倒木、難関、転落の恐れ」などの文字が並んでゐる。とにかく道さえあれば何でもないと、その急な下りに踏み込んだ。

本当に急な下りだ。足を滑らせたら深い谷の下の方まで転落しそうだ。周囲はブナの新緑が見事だが、眺める余裕はない。なお、このブナ林だけならここを下らなくても、尾根道から十分に楽しめる。

下りが急なだけでなく、倒木が多い。急斜面で下草が無いところは、道を見つけにくい。「迷いやすい」と書いてあるところだろう。しばらく行くと、上方から崩落している箇所があり、崩落箇所の向こう

側に見えるテープの所に渡るのに苦勞した。地面は水分を含んでいて、崩れやすい。ここで一メートルほど滑り落ちた。足をかけた石が濡れていて、体重を掛けたとたん、に滑ったのだ。足の下も、掴まるところも柔らかく濡れた土で、為すすべもなく滑っていった。運良く大きな石の所で止まった。服が泥だらけになったが、けがはしなかった。遙か下の方まで崩落した跡が続いており、運が悪かったらもつと

滑落しただろう。滑り落ちたとき、壁のような急斜面がこの先さらに続いているのを見て、四本杉は諦めようかという思いが一瞬脳裏をかすめた。しかし、何とか足場を見つけて、崩落箇所を渡りきった。周辺はブナから杉の巨木に変わっている。斜面には四本杉とはあれのことかと思うような大きな杉がそこら中にある。

目指す四本杉は、急斜面の途中にあった。これは

凄い。地上三メートルくらいまでは巨大な一本の幹で、そこからそれぞれ大木と言うに十分な四本の幹が天高く伸びている。遠くから見ると独立した四本の大杉があるように見えるはずだ。しかし、寿命が近付いているのか枝振りに勢いが無い。四本の幹には大きな鉄の輪が取り付けてあって、倒れないように互いに鎖で繋がれている。幹の高いところにも保護のための鉄の輪が取り付けてあった。以前いつも

利用している体育館の若い職員が、四本杉のことで東郷山に行つたと話していたのを思い出した。天然記念物であるこの四本杉の保護に関する仕事だつたのだらう。それにしても大変なところにあるものだ。東郷山のことを書いてこの四本杉に触れていないガイドブックはないと思うが、大変な思いをして降りて来ないと見られないというのがまたいい。たとえば崩落箇所が無くても、ここは難コースである。



幹の下の膨らみに腰を下ろさせてもらつて、一つ残して置いたおにぎりとたくあんを食べた。食べようとしたら、蜂、蠅、蚊その他無数の虫が顔と言わず寄りたかつてきた。そこで例の虫除けスプレーを帽子から服の袖、背中、ズボン、そして靴にまで吹きかけるとサツとすべての虫が寄りつかなくなつた。見事な効果である。でも蟻だけはスプレーのかかつたズボンにはい上がつてきた。

食べ終わっても、しばらくそのまま座っていた。周りは巨大な杉の原生林で、オードリリー・ヘツプバーンの「緑の館」という映画に出てくる森の中のような雰囲気だ。誰もいない。下界の音も全く届かない別世界にひとり身を置いているという実感が迫ってくる。後で考えると、熊が出てもおかしくなくらいなのだが、このときは熊のことは忘れていた。ただ森林の厳粛さに打たれていたのだ。

先週の宮島も、今週の窓ヶ山も例え一組ではあつても山中で人に出会ったが、きようは誰にも出会わなかつた。東郷山は阿弥陀山とともにわが家から最も近い山だが、深く険しい谷の中腹にあるこの四本杉で、短い時間だが完全な日常との絶縁を体験した。恐怖感と孤独感があるがものすごく厳粛な世界である。

標識から四本杉まで二五分で下りてきた。これを

今度は登る。心してけがのないように、慎重に登ろう。

休憩の効果があつたのか、途中呼吸を整えるために立ち止まることはあつても、ほとんど一気に登り切つた。危険なところも降りるときより登る方が足場もとりやすいし、いま降りたばかりなので道を覚えていゝる。下りより早く二二分で標識のところについた。しかし、約一時間の四本杉見物は大事業であ

った。

標識から頂上まではわずか六分でついた。東郷山の頂上は少し広くなっていて、木のベンチがあり、きれいになっている。

展望は南西側だけだが、これが悪くない。目の前に阿弥陀山があり、阿弥陀山からやや右方向に九〇七メートル峰までの、明るい緑に覆われた広くなだらかな尾根が手に取るように見える。さらに稜線は

遠く大峯山まで続いている。しかし、麓の伏郷あたりは東郷山自身の尾根が伸びていて見ることができない。

私は、芳という女性が戸山側から伏谷側に逃れ帰ろうとして、初冬の東郷山に迷い込むという小説を書きかけている。時代は昭和のはじめころである。彼女は日が暮れて暗くなった山の中で力尽きて、初雪に顔を埋めて死んでいるところを翌朝発見される。

発見されたとき、そこからは伏谷の部落が見下ろせたというラストを考えた。しかし、きよう歩いた体験から、彼女の山中での動きを少し考え直そう。

きようは、きようもと言うべきか、最初から道に迷って、主稜線はまだ遙か高いところらしいとわかったときに、時間はすでに十一時半を過ぎていた。めくらめつぼう尾根にはい上がって鉄塔の下に出たときが十二時十一分。その時は、この先どうなるの

かと思つたが、頂上に立つてみると、あの四本杉の難関をクリアして、なお十四時四十分である。きよこの無事を神に感謝したい。

下山道はなだらかな山道と、木の階段がつけてある急な下りの繰り返りである。木の階段は、靴の底に泥があつたり濡れていたりすると滑る。何度か転びそうになつた。



途中七、八分おきに三回、展望の開けた鉄塔の境界に出る。最初の鉄塔からは、頂上で見たのと同じように阿弥陀山から大峯山までと砂谷の集落の赤い屋根や道路が見える。二つ目の鉄塔では、平坦な阿弥陀山の左の方に大峯山が少し頭を出している。三番目の鉄塔では、向かい側に壁のようにびっしりと植林された峰が立ちふさがって、もう阿弥陀山は見えない。国道の大森のあたりからだど東郷山を隠し

ている峰である。国道を川角の方に進むとはじめて奥の方に東郷山が見え始める。三番目の鉄塔のところからは、左の方に砂谷の集落が見える。

やや西に傾きだした午後の日がさんさんと降り注ぐなかに、光の粒でわずかに霞んだ山並みや集落が静かに広がっている眺めは、郷愁を誘う。

家も近いというそんなゆったりした気分で、笹に

覆われたなだらかな道を下っているとき、突然大きな動物の走り去る足音に遭遇したことは先に書いた。

東郷山頂上から四〇分で林道に出た。以前妻と車で登山口を確かめに来たところだ。あときは、山仕事の車が道をふさいでいて、なかなか退いてくれなかったことなどもあって、何となくうさんくさい気分だったが、きょうは天気がいいせいもあってか、同じ道とは思えないほど素晴らしい。まず道のそば

を、岩を咬みながら流れる溪流が実に美しい。深い溪谷ではないので凄みはないが、とにかくきれいだ。植林の中も歩くが、開けたところでは周りの大木が青空に映えてまた素晴らしい。

この美しい風景の中で、《初夏のひとり歩き二〇〇一》の終わりを思うと感慨がある。昨年の徒歩旅行も手応えがあつたが、今年のシリーズもさまざま緊張感ある場面をクリアしながら、湯来に来てから

ずっと気になつていた山々を一通り歩くことができた。数えてみると、登つた山は五月五日の極楽寺山に始まり、大峯山、阿弥陀山、宮島弥山、駒ヶ林、岩船岳、御床山、向山、窓ヶ山そして東郷山の一〇座になる。またそれぞれの山行きは縦走やウォーキングとセットであつた。ざつと計算しても山道を含めて一八〇キロは歩いただろう。きのうの阿弥陀山一周では一日に三三キロも歩いた。満足できる内容

である。

しかし、さらに成就したい目標の山やウォーキングコースが次々と思ひ浮かぶ。それらは妻と二人で行くには、彼女にとってハードすぎたり、危険に巻き込んだりという不安があり、単独行でもしつかりした道の有無と、熊の不安が拭い去れない。だがやらないわけにはいかないという、自分の中にある執念のようなものに急かされる。たとへば、きのう見

たあの深々と木に覆われた湯来冠山がそれである。あれにひとり登ることを想像すると、ある種の恐怖感が湧いてくる。いつか必ずひとりで登ることになるといふ予感があるからだ。

いま、この林道から近いところに白井の滝というのがあつたらしいので、それを見ようと思つたが、道標が見つからなかつた。無かつたのか、見逃したの

か。

「ひろしま百山」の記述通り、林道に出てからちよ  
うど三〇分で伏郷のバス停に着いた。そこから家ま  
では一五分。十六時六分に無事帰着して、シリーズ  
の全行程を終えた。

(完)



## 《第一回徒歩旅行二〇〇〇》顛末記

（二日分歩いただけで断念した徒歩旅行）

山中與隆

二〇〇〇年春に行った一三日間六〇〇余キロ踏破の雄大な計画は、出発四日目に一三行程中二行程を消化しただけで断念して帰宅することになった。六月にも再挑戦を考えている。

## 出発

二〇〇〇年四月二十四日、月曜日の午後ウクライナに向け出発する妻を五日市駅に送ってから、徒歩旅行の最後の準備を整えた。荷物は新しく購入したリュック一つにまとまったが結構重たいものになった。

夕食をレトルトのカレーとハヤシライスで簡単に

済ませてから、おじいちゃんたちに出発の挨拶をした。

さらに旅行中に「英雄の生涯」の聞き取り練習をするために、もらったばかりの楽譜の製本とテープ録音、新しく買ったアーノンクルの「新世界より」の試聴とデータベースへの登録、歩きながらメモできるように行程表を一行程ずつに切り分け、その日のコースを示す地図を一日分ずつコピーするなどし

て、結局風呂に入って床についたのは一二時過ぎであつた。

四月二十五日、火曜日。五時起床予定だったが、五時半になつてしまった。大急ぎで朝食、戸締り、ガスの元栓、テレビなどのコンセント抜きなどすべて何とか予定の六時に出発の段取りとなつた。用便の暇がなかつたのが少し気がかりである。この気

がかりは、あとで現実に影響をもたらすことになる。  
玄関を出るとおじいちゃんとおばあちゃんが見送りのために外に出て待っていてくれた。おじいちゃんが見送りが写真を撮ってくれた。天気は良好。絶好のウォーキング日和である。

出発は六時三分。工業団地をまわって国道四三三号線に出た。《麦浪》の奥さんがその時間にもう店の準備をしていたので、立ち寄ってオーケストラのチ

ラシを貼らせてもらった御礼を言った。興味があるという人がチラシもチケツトも持っていていったということであつた。

川角交差点通過が六時二十三分。七曲がりを経て沼田分れが六時三十九分であつた。七曲がりの温度計は摂氏三度を示していた。川角からは歩道のない狭い道路で、この先こういうところをたくさん通らなくてはならないと思ひながら歩いたが、実際には

思ったよりはずつと歩道のある部分が多かった。この狭い道は、ガードレールにすれるように右端によつて歩くのだが、対向車がないときは向かい側からきた車は、ある程度よけるようにして通り抜けてくれるが、対向車があるときはかなりぎりぎりですつていく。特にトラックなどの大型車のときはかなりすれすれで、ときにはこちらが立ち止まつて待機する必要も起きる。

沼田分れから県道七七号線に入る。しばらく上り坂が続く。峠まで湯来町だった。このあたりで振り返ると大峯山が近々かと見えていた。この振り返るという行為は、徒歩旅行ではいつでも自由に出来るように思いがちだが、現実には疲れてくると肩に食い込むリュックの重みによる肩こりで首が回りにくくなつて、なかなか振り返らなくなつてしまうものだ。とにかくこの段階ではまだゆとりがあつた。



## 広島市に入る

峠を過ぎると広島市安佐北区に入る。まず戸山という地区である。ここは先日友人Mさんが、お父さんの出身地だといっていたところだ。彼のお母さんは砂谷の大森の出身で、お母さんは一山越えたとなり村に嫁入りしたのだね、とはなしたとおり、砂谷から峠一つ越えたところが戸山であった。ここは開

けた谷間の町だ。

私の地図ではここも県道七七号線となっているが、道路標示では県道一七三号線となっている。

久地はこれまでのコースでは断然人家の多い街で、特に「くすのき団地」はニュータウンといった感じの大きな住宅団地である。また久地は二十数年前、まだ湯来に居を構える前におじいちゃんたちが家を建てるための土地を探した候補地の一つであった。

久地の高速道路下には九時三十分着。ここまで約一六キロを三時間半で歩いたことになる。時速四・五七キロになる。順調である。

ここから県道三八号線に入り、布地区を経て飯室に達する。このあたりでは手のむくみがかなり気になる。

飯室が近づくと、いま廃線問題で揺れている可部線の可部三段峡間の鉄路が赤錆状態で道路と並行し

て走っている。まだ廃線にはなっていないはずだが、一時間くらい並行して歩いている間一度も電車に出会わなかった。このあたりは歩道がなく、車の往来も結構多くて歩きにくい。

飯室は歩き始めてからでは最も賑やかな街並みを持つている。ここは母方の叔母がそのむかし学校の先生をしたことがあるところだ。食堂や宿泊施設もいくつがある。レストランに入って焼き魚の日替わ

り定食をたべた。

食べ終わってからの歩き始めは足の裏や腿の付け根などがひどく痛んだ。しかしそれもしばらく歩くとうちに和らいできた。飯室からは国道二六一号線である。二六一号線は石見街道とも言われていて、これから江津までこの道は続いている。この国道には歩道がある。これまでの県道にもかなり歩道があるのには大いにたすかった。鈴張小学校前のチェツク

ポイントから千代田までの約一四キロは長い道のりであつた。

### 千代田にて

千代田バイパスの起点にあたる交差点にたどり着いたのが午後四時四十九分。交差点の手前にあつた薬屋で足の水ぶくれ用に消毒薬を買つた。その店で、

地図上では比較的近いように見える千代田温泉というのを聞いてみた。若い店員はあまり詳しくない風に首をひねりながら、車で一五分くらいだという。車で一五分という歩きだといくらく少なく見積もつても二、三時間はかかる。千代田温泉は今夜の宿泊所としては考慮の対象からはずさざるを得なかった。道幅の広い交差点で、大きな駐車場を備えたショッピングセンターがあるが、駐車場はがら空きで閑

散とした雰囲気である。そう言えばこのシヨツピン  
グセンターは「サックス」といって、道すがら何度  
かオープンズの広告が出ていたものである。向かい側  
にはガソリンスタンド、JAの大きな建物、道路の  
進行方向つまり北の方向は二六一号バイパスである。  
すぐ橋になっていて小さな上りになっている。その  
向こうの方にパチンコ屋風の派手な屋根飾りが見え  
ている。橋の近くまで行ってパチンコ屋風の方角に



目を凝らしてみたがホテルや食べ物屋らしきものは見当たらない。一キロほどもありそうなところを歩いて確かめに行く余力もなかった。

交差点に戻って少し西に行ってみた。一〇〇メートルくらいで突き当たりが三叉路になっている。左側の角は役場らしい。左右に伸びた道の両側は古い街並みで、自動車修理の店や理容店があるものの何となくひっそりと夕方を迎えているようで、ここに

も目指すものがあるようには見えない。また交差点に戻った。そこに大きな焼肉の看板があつたが、それがどこにあるのか分からない。少なくとも見渡す範囲には無かつた。やや途方にくれたといつた感じであつた。

シヨツピングセンターの中に食べ物屋くらいあるかもしれないと、足を引きずつて行つて見たが、食料品は売っているが食べさせるところはない。中に

入ったついでに小便だけでもと思ったが、トイレは食料品売り場を通つてその奥の方にあり、そのとき私は歩きながら飲んだスポーツドリンクのペットボトルをぶら下げていたので、同類のものの売り場を歩いて万引きと間違われたくないので、小便も諦めた。このときは気力も知力もすっかり衰えていて、何を考えるのもめんどうになつていた。

ショッピングセンターの広い駐車場をとり囲むよ

うに走っている国道の柵に街並みの商店や民家の略地図が貼り付けてあった。地図上には二軒の旅館が並んで載っていた。しかし、その地図は一体どここのことが書いてあるのかがよくわからない。現在地が示されていないのだ。少なくとも私にはそう思えた。千代田町といっても広いはずで、車ならすぐのところでも歩きではなかなかである。あてもなくもう一度ショッピングセンターの方に歩いていった。よく

見ると奥の方に「ジュンテンドー」の文字が見えた。それは五日市にもある日曜大工用品のスーパーの名前と同じである。そこならトイレにも行けるかも知れないとぼんやり考えて、その方にとぼとぼ歩いた。そのとき通りかかった若い作業着の男の人に、あの略地図にある旅館の事を聞いたが、自分はここの者ではないので分からないと言う。やはりあの旅館と  
いうのはすぐ近くのことではないのかもしれない。

今度は、食料品関係の人だろうか、白いうわっぱりを着たおじさんに訊いて問題は解決した。その旅館というのは私が先ほど覗いた役場のある三叉路から北に二〇〇メートルくらいのところにあつて、《京屋》さん、《大黒屋》さんと二軒並んでいると元気良いい調子で教えてくれた。ホテルもあるが少し離れているので、と私のくたびれ果てた様子も察してくれましたようだ。私が救いの手を差し伸べられたような気

持ちで礼を言うのと、どうぞゆっくり休んでくださいと、よたつきながら歩きだす私を見送ってくれた。

役場の三叉路から二〇〇メートルがなかなかであった。あとでわかったが少なくとも五〇〇メートルはあった。きつと私にがっかりさせまいと距離を短めに言ってくれたのだろう。

## 《京屋》 旅館

最初にあつた《京屋》の門を叩いた。若い快活そ  
うな女将が出てきて、今晚の夕食から大丈夫と言わ  
れたときには、ついに安全な港に着いたという強い  
安心感につつまれた。この宿探しの一時間足らずの  
間に感じた不安、途方にくれた気持ち、感謝の気持  
ち、安心感などは、日常生活では味わえないほど大



きいものであつた。

初日のトータル約四四キロを昼めし休憩を入れて一〇時間五〇分で歩いたことになる。平均時速にすると四・〇六キロである。朝のうちの時速四・五七キロは持続できていない。

靴を脱ぐときに足の裏の状態が確認できた。両足とも指の付け根から土踏まずにかけての広い範囲に

わたって水ぶくれが出来ていた。まだつぶれていないが、足を踏むとひどく痛む。しかしこの日は、それよりもむしろ腿から足の付け根にかけての筋肉痛が激しかった。よたつきながら部屋に案内された。よく磨かれた狭くて暗い廊下を通りながら、ここがトイレ、あそこがお風呂、食堂はここと説明された。風呂の前に置かれている全自動の洗濯機も自由に使っていると言ふことであつた。

さつそく浴衣に着替え、汗のついたものは全部洗濯機に投げ込んでから風呂に入った。我が家の洗濯機は数ヶ月前に初めて全自動になったが、それが幸いして、戸惑うことなく洗濯機の運転ができたのは嬉しかった。

風呂では、足の裏がはじめのうち少ししみたがたいたことはなかった。

夕食のとき、あすは朝が早いので朝食はいらない

ことにして、清算も済ませた。五四〇〇円であつた。このような値段で泊まれることが多かつたら予算的にだいぶ助かる。

食事は、竹の子の和え物や煮魚など家庭料理的なものであつた。飲み物は、と勧められたが缶ビールのミニ缶があればと言つたら、それは無いのでお父さんのをコップ一杯上げようといつて、宿の主人が開けていたびんから注いでくれた。コップ三分の一

くらいもらった。このビール一口は実においしかった。

私が食事している食堂の隣が厨房で、そこで《京屋》さんの家族も夕食を食べていた。小学生の女の子二人と若い夫婦、それにおばあさん。実によく会話の弾む家族で、子供たちの学校の出来事や、うちには子供が三人もいる上に、その子は三人と言っていたのだが、お客さんもたくさんいて大変でしょう

と小さい子がお母さんの仕事ぶりのことを話したり、  
こんどある子供会行事のことなどを話したりととに  
かく大人も子供も良く話す家族だ。大人は子供の話  
しかけに面倒がらずに、また教え調子にもならず自  
然な感じで会話が進んでいた。食堂のテレビの音が  
聞き取りにくいほど大きな声だったが、会話の内容  
が明るいので邪魔にはならなかった。この家庭の子  
供たちは将来大丈夫だ。

おかずの量は食べきれないくらいであつたが、疲労した身体に栄養を十分に補給しようとなんばって全部平らげた。

湯来に電話をかけた。家の電話のコンセントを抜いてしまったため、留守番電話が切れていることに気づき、おじいちゃんにセットを頼んだ。おじいちゃん、コンセントの方は良くわからないので、子機を手元に置くことにするといつてくれた。帰って

からわかったことだが、この電話には広島の子から、注文しておいた「英雄の生涯」のスコアが入荷したという電話が入っていたから、頼んでおいてよかった。

部屋に戻るといつのまにか蒲団が敷いてあった。旅館に在ることを感じさせる瞬間である。今日一日のメモを整理し、出来事や感じたことなどをノートに書き、あすの行程の確認と準備を済ませてから、



「英雄の生涯」のパート譜を見ながら妻に借りたウ  
オークマンで聞いた。音は案外クリアーで、各パー  
トの動きもよく聞き取れる。リヒャルト・シュトラ  
ウスの曲を、楽譜を見ながら聞くのは初めてだが、  
チェロパートには非常に高い音が多用されていて弾  
きこなすのは大変そうだが、リズムと出入りに関し  
ては思ったほどではなさそうである。この旅行中に  
何度も聞けば相当弾きやすくなりそうな気がする。

あまり好きな曲ではないと思つていたが、よく聞くとなかなかいい曲である。

となりの部屋から尺八の音が聞こえる。たしかとなりには私より年配らしい人が入つていて、コタツを出してもらつている。長逗留しているのかと思う。

「五木の子守唄」や「宵待ち草」を練習している。鄙びた尺八の音は喧しく感じないものだ。この人は翌朝廊下で出会つて言葉を交わした。尺八のはな

しはしなかつたが、私の徒歩旅行のことを話した。ゆつくりと旅を続けられるのはうらやましいと言つていた。

話は戻るが、その夜は足腰の痛みでなかなか眠られず、夜中に何度も目が覚めた。外はしきりに雨音をたてていた。予報どおりである。

五時前に目が覚めたが、筋肉痛と全身の疲労感からこの雨について出かける気力がわかず、早くも一

日休養することに決めてもう一度蒲団にもぐりこんだ。

七時頃起きていって、昨夜一旦断った朝食を頼むと快く引き受けてくれた。この日は風呂二回、「英雄の生涯」の勉強二回、昼食とあすの朝食の買出しを兼ねた散歩、三時間近い昼寝で過ごした。雨は夕方になって小止みになり、空もわずかながら明るくなってきた。

この旅館の位置は、北に伸びる二六一号線と平行に走っている旧市街の道に面して、裏手の川を渡ると、昨日遠くから眺めたパチンコ屋風の屋根飾りのところがすぐそばである。

それは王冠をかぶった王様の屋根飾りで、やはりパチンコ屋であった。散歩はあすのウォーミングアップも兼ねて、旧道をずっと北の方まで歩いて遠回りしながら二六一号線に出て、小さく盛り上がった

橋を、昨日見たのとは逆から渡って役場の三叉路を通つて宿に帰つた。筋肉痛も足の裏も昨日よりはずつと楽になっている。

途中二六一号線沿いにあつたアメリカ調のレストランで焼肉ピラフを食べた。後でレシートを見てわかつたが「フアンキートンキー」という名前の店であつた。店の中は板張りの床がきれいに磨いてあつて、全体的にこぎれいであつた。なにしろいたると

ころに英語で何か書いてあつて、どれが店の名前かよくわからなかつたのだ。客は私と田舎風のおじさんの二人だけだったが、私が店を出るとき若者が一人入つてきた。

宿に帰つてからは長い昼寝、夕方この日二度目の風呂に入つて夕食、「英雄の生涯」をやつてから、娘に葉書を書いて、早い時間に就寝した。

この晩もとなりから尺八が聞こえてきた。こんど

は二人で合わせている。尺八のオリジナル曲か、民謡のような音楽である。一人の音は澄んでいて、音色も安定している。気持ちよくこぶしが入って非常に流れがいい。もう一人の音は、これについて吹こうとしているようだが、ときどき遅れたり音がうらがえったりする。一曲吹き終わると何かぼそぼそと話し合っている。九時ごろ、ではこれで失礼します、ありがとうございますございました、どうもすみませんでした



などと言葉を交わして一人が帰っていった。一人になつてから少しだけ吹いていたが、すぐやめて静かになつた。帰つていった人が先生格なのだろうか。となりの人は、尺八の先生に習うためにこの地に着て宿に泊まっているのだろうか。

二日目は昨晚よりよく眠れた。

## 再び歩き始める

四月二十七日木曜日、旅行の三日目。歩きの行程としては二日目をいよいよ始めることになる。このときすでに足の裏の水ぶくれがさらに剥けていくことはわかっていたが、これが今回の最後の歩きになるのはこの時点ではまったく頭に無かった。

五時前に起きて顔を洗い、昨日買っておいいたパン

とミルク紅茶と野菜ジュースで朝食をすませた。出かける前に無理やり便所にも行った。少し出た。衣類は洗濯したのが良く乾いていたのでそれを着た。

六時ちようどに宿を出た。もう朝の支度を始めていた女将が見送ってくれた。小さいが庶民的で親切な宿だった。

娘に書いた葉書を出すために五〇メートルくらい先の郵便局のポストまで足を伸ばした。たった五〇

メートルが問題になるくらい、足の裏は踏むたびに痛かった。歩きなればそれほど感じなくなることは、昨日の歩きでわかっていた。たしかにしばらく歩くと、痛みというより一步一步しみるような感覚に変わってきた。

週間予報では昨日の雨の後、数日好天が続くはずであったが、今朝の予報では山陰側に行くほど天気は悪いらしく、すでに出発のときにも小雨がぱら

ついた。途中でカッパを着、リュックには雨覆いをかけての行軍となった。

大朝に向かう国道二六一号線は広い道路だ。途中何度か高速道路をくぐった。千代田までに出会った。高速道路は久地でくぐったのと飯室で近づいたのが広島自動車道、鈴張から千代田まで近くを併走していたのが中国自動車道で、千代田から二六一号線に沿うように通り、大朝までに二度くぐるのが浜田自

動車道である。

家を出る日も昨日も行かず、今朝無理やり少しだけであつたから、気になるところであつたが、案の定三〇分も歩かないうちから便意を催してきた。それからしばらくは、農家に外便所は無いかとか、工事現場に仮設便所は無いかとか、夕方宿に着くまで我慢するしかないかとか、民家に突然トイレを貸してくださいと言つても不審がられるだらうなとか、

そんなことばかり考えながら歩いた。そのためか足の痛みはしばらく忘れることが出来たようだ。少しでも我慢できるように何度も小便をした。そのたびにうしろからもちびりそうで苦労した。少しはちびったかも知れない。一時間半くらいのところで民家が切れたので、少し山に入ってとうとう野糞となった。上手い具合に道路からは見えないで、二〇センチくらいの流れがあるとところを見つけてしやがんだ。

やはり下着にはもうかなりちびっていた。ティツシユを流れの水で濡らしながら拭くと主だった汚れは落ちた。用を足した後も流れの水が尻を洗うのに多いに役立った。すべての処置が終わるまで誰も来なかった。幸運である。終わってみると、すぐ傍に××家の墓というのがあって、墓前にはまだ枯れていない花があった。仏様のご利益に感謝。すつきりした



気分で、ふたたび足の痛みを感じながら歩き始めた。

それにしても、五日市の焼肉屋の駐車場で見たあの光景、男の人が大量のティッシュペーパーを風に吹き散らされながら、下着ごと半分ずらしてもらしたうんこを処理していたのを思い出す。その様子がひとつごととも思えず強く印象に残ったのは、今日の自分に起こったことの前兆だったのだろうか。人目の多い街中で無かったただけ私のほうがずっと幸運で

あつたといえる。

大朝には午前八時四十五分についた。千代田からここまでは一二キロだから、野糞時間も含めて時速四・三六キロとなる。

大朝インター前の交差点は国道二六一号線と県道五号線の分岐点である。国道をたどると《道の駅瑞穂》を経て三泊目の予定地因原に向かう予定のコースである。予定のコースで行くとその後江津で日本

海に出てしばらく国道九号線を西下し、うやがわと  
いうところで第四泊目となる。うやがわは浜田まで  
まだ一〇キロ以上ある地点だ。一方県道五号線にす  
ると、浜田までは六〇キロくらいで、今日中には無  
理だが、途中一泊すればその次の日には浜田に着け  
る。昨日一日休んだので、短縮コースを採ることに  
した。県道とはいえ主要地方道で広くて歩道のある  
良い道である。ずっと似たコースを通っているらし

く、高いところに浜田自動車道がいつまでも見え隠れしていた。また何度か下をくぐった。この時はまだ翌日その高速道路をバスで逆方向に走る事になるとは予想もしなかった。

変更したコースを歩く

大朝から寒曳きを経て瑞穂までは人里はなれた山

間部の道路で、車の往来も少なく歩きやすい代わりに、雨の中を何時間も一人で歩くのは少し心細くもあつた。冷たい雨はこの日最後まで降り続く。気温も摂氏一〇度くらいまでしかあがらなかつたようだ。しかしこの雨のおかげで、あのお墓の前の遺棄物もきれいに流されることだろう。

大朝を出て約2時間、長い長い上り坂を登って行き着いた峠が三坂峠で、ここから島根県である。県

境を越えたのは十一時十分であつた。川の流れはただ広島方向である。それについてのメモが落ちていたので正確なことは忘れてしまつたが、川が日本海側に向かつてとうとうと流れているなと思つたのは、昼食を食べた瑞穂を出てしばらくしてからだつたよ  
うな気がする。

延々と続く山道にうんざりしかけたとき、急に眼下が開けて街らしいものが見えてきた。建物の屋根

は洒落たかつこうをしていていかにも観光地のレストランやホテルのように見える。元氣百倍で坂道を下りていった。最初に目に付いたホテル&レストランというのは中に人はいたが営業はしていなかつたが、すぐ近くに何軒も食堂があつた。そこから一番近いレストランに入つて昼食にありついた。大朝で県道五号線にコース変更してから三時間半くらい歩いたことになる。千代田を出てからは六時間以上経

っている。

そこは瑞穂インターチェンジのあるところで、スキーのリゾート地であつた。シーズンには四〇万人が来るそうだ。中国地方にこんなスキー場があるとは知らなかつた。

三十代後半くらいに見えるレストランの主人は、私の格好や上着の胸の会社のロゴにも興味を示していろいろ話しかけてきた。彼は毎年八月に平和行進



で広島まで歩いているのだそうだ。また、以前建設関係の仕事をしていて、××化研というかつての私の関わってきた業界の社名などを口にした。私もコンクリート補修のことなどを話した。私のいた会社を聞くので言ってみたが、その社名は知らなかった。また観光の立場からか、いま歩いてきた辺りの道路わきのごみの散乱状態を熱心に聞いていた。

私は、それよりも浜田までの間に宿泊施設があるかどうか心配で、その主人に相談した。旭町まで行けば旭温泉というのがあるそうで、そこの宿二軒の電話番号をメモしてくれた。しかし、今からここを出て、明るいうちに着けるだろうかということを出て、暗くなると熊ということもあるしというのだ。そこまで二五キロとして時速四キロで六時間ちよつと。せめて五キロで行ければ大丈夫

なのだがという。大朝からここまで約一二キロを三時間二〇分で来た。時速三・六キロである。上り坂の急な道だったせいだろう。途中の三坂峠というのはかなり標高が高いところだったものと思われる。千代田からのトータルでは二五キロを六時間二〇分かかったことになり時速三・九五キロである。やはり時速四キロが精一杯だ。そうすると旭温泉に着くのは午後七時にはなりそうである。雨なので七時は

真つ暗だろう。しかし行くしかない。「私の青空」の  
昼の再放送を見てからレストランを出た。立ち上が  
るとき足の裏の激痛でよろめいた。店の前の公衆電  
話で、主人の教えてくれた一軒の《しろつの荘》と  
いう旅館に予約を入れた。瑞穂インターのところか  
ら県道を歩いていくが、遅くなっても必ず行くから  
と念を押した。

## 旭温泉目指して

途中県道五〇号線、県道七号線を経て再び県道五号線にもどるといふコースを採った。地図上でもそのまま五号線をたどるよりも近いし、浜田、旭への案内板もそのコースを示していた。

今度は三坂峠越えの瑞穂までの道よりは民家が点在している。しかし、それもやがて人里はなれた道

になつた。雨が降り続き、早く暮れてきそうである。途中パトカーが寄つて来て、行き先やら目的地やらいろいろ聞きながらついてきた。熊が出ることもあるから明るいうちに何とかしなさいと言つて去つていった。二五キロあるとすると、早くて午後七時、足の裏の痛さからして、さらにペースが落ちれば八時、九時と言うこともあり得る。そう思うと若干の焦りと不安も感じてきて、歩くペースを少し速めた。

午後五時、あたりが薄暗くなりかけたときまだ山道の中だった。バス停があつたので近くに行つてみると、町営バスの路線になつていて、一方に行くのが五時一分と、反対方向行きが六時十四分とあつた。五時一分が歩く方向に行くのだつたら乗る決心をしてバスを待った。そこに書いてある行き先の地名からはどつちが私の方向と同じなのかわからなかつたのだ。また私の時計は丁度五時だつたから、もしか

したらもう五時一分は行つてしまつてゐるかもしれない。とにかく少し待つてみた。五時四分ごろ私が向かつてゐる方から黄色いバスがやつてきた。これで六時十四分というのが私の進む方向行きであることはわかつた。しかし、その場で一時間以上もじつとしてゐるわけにはいかない。気を取り直して歩き始めた。

なんと次のカーブをまわつたら旭町の街並みが見



えるではないか。今のバスが反対行きだったことは、歩きを全うするためには実に幸運だったことになる。しかし、あとでゆっくり地図を見直すと、しばらく前県道五一号線との分岐点を午後三時五十三分に通過している。それから時速四キロで歩いたとすると、再び五号線に合流する旭の街のすぐ近くまできているはずだということを読めたはずである。冷静さが求められる場面であつた。

七号線が五号線に合流するところはかなりの街並みで、商店街が長く連なっている。

これまでも何回か出会ったのだが、旭温泉という案内板と、《風の国・おんせん》という案内板があり、同じところのことを指しているものと思っていた。

ただ瑞穂で調べたときに旭温泉までは長くて二五キロ位とみたのだが、かなり歩いてからの案内板でも、《風の国》までだと二七キロとなっているのだ。き

つと温泉は旭の街からそうとう山の中に入ったところにあるのかも知れないと想像しながら歩いてきた。旭についたら、五号線から外れる部分はタクシーにしてもいんちきにはならないだろうとも考えた。もつともタクシーなどと言うものがあればの話である。しかし、ここにきて街の人に訊いてわかった。交差点の案内板に《風の国》一〇キロというのがあり、もう一つ別の看板には旭温泉三キロとあった。実は

この二つは別の場所で、《風の国》というのは旭温泉からさらにしばらく行ったところにあるのだそうだ。あと三キロとわかつて多少元気が出た。いや、大いに元気が出た。交差点に着いたのが五時十三分、明るいうちに宿につける。

もつと早く誰かに聞けばよかったのにと思ふかもしれないが、瑞穂を出てから車以外の人に出会ったのはこれが初めてだから仕方がない。そういえばパ

トカーに訊くことは出来たかもしれない。しかしあの時点ではそういう具体的な疑問にはいたっていないなかつた。

あと三キロは長かつた。旭インターまでの上りもきつかつた。しかし、不安がなくなつたのか、学校帰りの小学生に、旭温泉の方に帰るのなどと話しかけたりした。着いてみれば所要時間は四五分くらいであるから、時速四キロでちょうど距離は三キロと

つじつまが合う。疲れのために長く感じたのだ。

瑞穂から旭温泉まで二三キロくらい。午後一時丁度に出て、着いたのが六時丁度。所要時間五時間。平均時速は四・六キロ。今日の午後はかなりがんばった。朝から通算すると、四八キロを一二時間で歩いたことになり平均時速は四キロである。また家からでは旭温泉までは九二キロ。これを実際に歩いた日中を昼食時間なども含めると二三時間かけて歩い

たことになる。平均時速は丁度四キロとなる。

### 旅行の続行を断念

《しろつの荘》に着いて靴を脱ぐとき、濡れた靴の外側に赤く血がにじんでいるのがわかった。その靴を脱ぎ、真つ赤に濡れた靴下を脱ぐのを見て宿の人が顔をそむけた。足の裏の皮膚が大きくベロンと剥

け、中から赤みが丸見えになっている。両足ともほとんど同じ状態であつた。スリツパが汚れることをことわつてから、部屋に案内してもらつた。よろめいて荷物が持てないのを見て、恰幅の良い女中さんが持つてくれた。部屋でスリツパを脱ぐと畳が汚れるので、スリツパのままあがつた。

部屋に強い暖房がかかつていたので、濡れたものをぶら下げ、汚れたものを脱いでまず風呂にした。



宿の人が心配して、余分のタオルと足をくるむためにビニール袋を持ってきてくれた。今日は足がしみそうだったが、野糞のこともあり風呂を省くわけにはいかない。

湯船に漬かっても思ったほど足の裏はしみなかつた。しかし、宿の中を歩くのにも四苦八苦した。夕食後、明日休養日にすることを決めて、もう一泊予約した。朝早いので朝食は夜のうちにおにぎりを頼

んでおいただが、快く普通の朝食に変更してくれ  
た。ここの宿賃は一泊二食で六五〇〇円、税とサー  
ビス料を加えると七八〇〇円であつた。そういえば、  
千代田では税もサービス料もついていなかった。

旅の記録も、「英雄の生涯」もする元気は無く、夕  
食後はすぐに床に入った。しばらくは広島対阪神の  
藪、高橋の投手戦を見ていたが、それもすぐ消して  
しまった。足の裏が痛くて眠れなかつた。眠つても

たびたび目が覚めた。小便に行くのも足が痛いことを思うと憂鬱だった。

朝、蒲団の足のあたりがかなり血で汚れた。今日一日休んでも明日から旅を続けるためには、この足には何らかの処置が必要だろうと考えて、医者に行くことにした。訊くと、昨日の交差点の近くに一軒だけ医院がある。タクシーも旭町にあると言うので、呼んでもらった。

タクシーはおばさん運転手だった。乗るとすぐ、酒井医院でいいのですねと訊かれたので、他にもあるのかと訊くと、以前は何軒かあったがみな死に絶えて今は一軒だけだと言う。それなら訊くこともあるまいと思つたが、もしかしたら浜田の病院と云うこともあると思つて訊いてくれたのだらう。その話を聞いて、酒井医院もよぼよぼの老医師がやつているに違いないと想像してしまつた。

酒井医院は、昨日たどり着いた交差点の近くでとなり石見今市郵便局があつた。待合所にはコタツがしつらえてあつて、それにすっぽりもぐりこんで寝ているような患者もいた。そこに待っている十数名の患者はすべてかなりの高齢者に見えた。その間を何人かの看護婦が忙しそうに立ち働いており、患者一人一人の名前がみなわかっているようで、優しく話し掛けながら診察室に導いたりしていた。都会

の病院とはまったく雰囲気が違う。

案外早く私の番がきた。医師は六十歳くらいの貫禄のある、いかにもお医者さんらしい白髪の紳士であつた。診察台にうつ伏せになつて消毒などして貰ひながら、こうなつた経緯などを訊かれるままに話した。医師の診断は、歩くのは中止し、消毒をしながら皮膚の再生を待つしかないというものであつた。二、三日休んでもまったく解決はしない、この

状態でむりやり歩くと、かかとの方に負担がかかつて骨に異常をきたすことになるとも言われた。二一〇〇円の治療費を払った。保険証を持ってきてよかつた。

となりの郵便局の公衆電話でタクシーを呼んで宿に帰った。タクシーは同じおばさんだった。事情のわかった客と運転手の間では、徒歩旅行は中止にせざるを得ないことが宿に着くまでの三分間の話題で

あつた。

宿のフロントで診断結果を伝え、旅行は中断して帰宅するので今夜の宿泊はキャンセルした。ここでも事情がわかっているので快く認めてくれた。インターチェンジで広島行き的高速バスがあることを教えてくれた。すぐ出れば十時四十九分の便に間に合います。いそうなので急いで準備した。部屋に入ると、今日一日休むと言つてあつたので、新しいきれいな蒲団



が敷いてあつた。配慮に感謝しながら部屋を出た。フロントではまだ早いから部屋で休んでいてくださいと言われた。しかしインターまでの二キロはこの足では時間がかかるからと出かけようとしたら、初めからそのつもりでいたようで、車で送ってくれると言う。お言葉に甘えることにして、一便前の十時四分に乗ることにした。昨日最初に部屋に案内してくれた恰幅のいい女中さんが、いわゆる四駆で送つ

てくれた。

## 帰宅

待つほどもなく広電のバスがきた。バスは空いていた。昨日下から見上げた高速道路を、今度は逆方向に走りながら、昨日歩いた県道を見下ろす旅となった。一時間二〇分ほどで広島バスセンターに着い

た。料金は二三九〇円。

広島バスセンターは、バスを降りてからの出口や他の路線への乗換え口が何となくわかりにくい。それらしい案内板も見当たらない。ずいぶん以前にも同じような経験をしたことがある。エスカレーターを上ったり下がったりしてやつと湯来線の切符売り場と乗り場のあるフロアに行き着いた。乗車口の近くの立ち食いそば屋でざるそばを食べてから、十二

時十三分の杉並台行きに乗った。川角でバスを下りて、家までは佐々木タクシーに乗った。バスが八八〇円、タクシーが六七〇円、帰りの運賃はめて三九四〇円であつた。

自分の家に入る前に、母屋に声をかけたがなかなか返事が無い。中からテレビの音は聞こえているので留守ではない。台所に回ってやっと出てきた。事

情を話し自宅に落ち着いた。三日かけて行つたところであつたが、帰りに要した時間は三時間少々であつた。

## 反省

今回の失敗の原因は言うまでも無く、足の裏の皮膚が歩行に耐えなかつたことである。それ以外のこ

とは、少なくとも二日歩いた限りでは何も問題は無かった。足全体の筋肉や関節などは、歩き終わったときはかなり疲労していたが、風呂につかって一晩寝ればそれらは十分に一日の歩行に耐える程度には快復したように思う。もつとも、一三日間続けた場合にもそれですむかは、今回のトライアルでは判断できない。

とりあえず顕現した問題は足の裏である。考えら

れる原因を列举してみると、①一日の行程が長すぎて足の裏の耐えうる限界以上であつた。娘の話では、江戸時代の人が標準としたのは一日七里位とのこと。今回は一日目が四四キロ、二日目が四八キロであつた。②スピードが速すぎた。ワングルなどがどれくらいで歩くのかわからないが、今回は全平均では時速四キロであつたが、早いときには四・六キロで歩いている。これも娘の話では、相模湖でのナイトウ

オークで一晩中だらだら歩いたが、だれも歩けなくなるようなダメージは受けなかったとのこと。③足回りの装備に欠陥があつた。まず靴が長時間歩きつづけるのに向かなかつた。靴の中で足がすれたのが皮剥けの原因と考えられる。また、靴下が薄すぎたのではないか。④基本的に足の裏が強くなかつた。⑤歩くフォームがよくなかつた。⑥その他。



二、三日して皮剥けの痛みが減ってきてても、足の腫れと痛みが続いていることに気づいた。痛風である。思い出してみると、歩いているときも右足親指のいつもの場所が少し痛かった。すでにそのとき痛風も始まっていたのだ。

もう一つ考えておかなくてはならないのは、歩くことの意味である。この計画では観光とか何処かを

訪ねるといった特定の目的地は一切なく、ただひたすら歩くと言うものだ。今回歩いてわかったが、歩いているときには何も考えないものだ。ただ寒ければ寒いと感じ、足が痛ければ痛いと感じ、肩がこればこれも痛いと感じ、うんこがしたくなればどこで出来るかばかりを考え、雨が降れば雨だと思っただけである。それ以外にも、例えばつつじがきれいだったか、新緑が目立ってきたなとかも目に入ってくるこ

とは認識する。しかし、人生を考えたり、哲学的な思考をしたり、小説の構想を練ったりなどまったくしない、あるいはできない。一方、その日の行程を終えて宿に落ち着いたときの安堵感と、達成感は大きい。自分の限界を試しているという満足感もある。もう一回再挑戦することを考えると、大変だと言う気持ちや大丈夫だろうかと言う気持ちもあるが、ぜひやってみたいと言う気持ちも強い。

たった、二日あるいは四日ではこの結論は出せない。やはり再挑戦すべきなのだろうか。

完

## 編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな  
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同  
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣  
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。  
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中  
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう  
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの  
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))  
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前についで



與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。

## 著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も  
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた  
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴  
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの  
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら  
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。  
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

## 今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

## 既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

## 既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北



## 三坂峠 二話

第一話 《お蓮・勘兵衛 悲恋の墓》

第二話 《緑のトンネルで》

## 阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

## 四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットのあゝ風景

「オセロ」く手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

## 紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

## 短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

## 12 カルテット

## 最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

---

## ひとり、山を歩く

---

2022年10月20日初版発行

著者：山中與隆

編集：山中伶子

表紙素材元：

[www.ac-illust.com](http://www.ac-illust.com)

・タイトル：山 景色 連山

登山 登山部 趣味

作者：ニッキーさん

イラストのID: 22672094

・タイトル：山のイラスト

作者：あいんさん

イラストのID: 22516181

©Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>

---